

平城京左京三條二坊六坪  
発掘調査概報



6AFI-PQ 地区全景

# 序

1200余年の昔、唐の長安を模して造られた平城京は、廃都の後その大部分が田園と化していたが、近年に至り急速に市街化が進みつつある。しかし平安京などとくらべ、なお旧態を存しているところが多く、市街化に先立ってその遺跡を究明するとともに、重要なものについては保存の対策が講ぜられねばならない。

当研究所平城宮跡発掘調査部においては、京内の数ヶ所についてすでに調査を行つて来たが、昨昭和50年近畿郵政局の依頼にもとづき、奈良郵便局の移転計画用地である左京3条2坊6坪の発掘調査を担当した。

発掘調査は同坪の3分の1以上にわたって行われたが、その結果、当初予想もされなかつた奈良時代の大規模な庭園遺構が発見されたのである。石組で固めた延長55mに及ぶ園池が、ほぼ完全な姿で遺されており、またこれと一体の形で、おおむね2期に区分される建物などの遺構が見出された。

あたかも東山を借景とする見事な庭園遺構で、園池の形や水の勾配などから曲水の宴が催されるにふさわしいものであり、また後期の建物は後の寝殿造の地割りに類似している。出土した木簡や瓦、そして建物の編年などから、奈良時代を通じて存続したものであることが明らかであり、また平城宮に関連した公的な庭園ではないかと推定される。

8世紀の庭園が、万葉集や懐風藻にうたわれた姿ながらに、このような完全な形であらわれ、その占地、地割、意匠、作庭技法などを細部まで知ることが出来るのは、日本庭園史上からも画期的なことであり、上代遺跡としてまことに貴重なものと言わねばならない。ここに取り急ぎ調査の概要について公刊する次第である。

今回の発見は、庁舎建設のための調査中にたまたま行われたものであり、今後も積極的な事前調査が行われる体制の必要を如実に示したものと言うべく、更に進んで京内の重要遺跡について組織的計画的な調査が行われることを望むや切なるものがある。

1976年3月

奈良国立文化財研究所長

小川修三

# 目 次

## I 序 章

	頁
1. 調査の経過	1
2. 調査の概要	2
3. 写真測量	3

## II 遺 跡

1. 遺跡の概観	4
2. 遺構	5～10
3. 占地と時期区分	11～12

## III 遺 物

1. 瓦 塼 類	13～14
2. 土 器	15～16
3. 木 製 品	17～18
4. 木 簡	19～20

IV 結 び	21～22
--------	-------

## 例 言

1. この概報は、近畿郵政局の依頼により昭和50年6月（予備調査）および10月～12月（本調査）にかけて実施した奈良郵便局移建計画地の発掘調査に関するものである。
2. 調査は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部（部長鈴木嘉吉）が担当し、予備調査には、牛川喜幸、森郁夫、横田拓実、宮本長二郎、吉田恵二、山本忠尚、須藤隆、本調査は、狩野久、佐藤興治、田中哲雄、岡本東三、綾村宏、毛利光俊彦、松本修自が参加した。なお調査補助員として東京大学玉井哲雄が参加した。
3. 報告書の作成には調査員全員があたり、全体の討議をもとに次のように分担執筆した。  
I・II・田中哲雄、松本修自、III-1・岡本東三、III-2・川越俊一、III-3・毛利光俊彦、III-4・狩野久、綾村宏、IV・狩野久、田中哲雄。なお花粉分析、岩石鑑定、植物遺体の鑑定は大阪市立大学教授 粉川昭平、同助手松岡数充、神戸市立教育研究所 前田保夫の各氏に依頼し成果を得た。
4. 本書の編集は田中哲雄、遺構・遺物・図版の写真は佃幹雄が担当し、航空写真の撮影はアジア航測株式会社があたった。

## 図 版

卷 首 6 A F I - P Q 地区全景	P L.1 6 A F I - P Q 地区遺構実測図
P L.2 6 A F I - P Q 地区本調査全景	P L.3 園池全景実測図
P L.4 園池全景写真	P L.5 建物・塀
P L.6 導水路 井戸	P L.7 柱 穴
P L.8 木 構	P L.9 木 組
P L.10 池 細 部	P L.11 池 細 部
P L.12 池 細 部	P L.13 池(湛水状況)
P L.14 軒 瓦	P L.15 木 製 品
P L.16 木 簡	P L.17 植物遺体

## 挿 図

頁

fig 1 6 AF I - PQ 区発掘状況	1	fig 2 平城京左京三条二坊六坪位置図	2
3 6 AF I - PQ 区周辺地形	2	4 6 AF I 地区割図	2
5 ヘリコプター空中写真撮影	3	6 クレーン空中写真撮影	3
7 6 AF I - PQ 区標定点配置図	3	8 6 AF I - PQ 区地山	4
9 6 AF I - P 区堆積土層図	4	10 SD 1560, 1525, 1526 堆積土層図	5
11 池堆積土層図	6	12 SX 1503 平面断面図	7
13 SX 1663 平面断面図	7	14 SE 1511 断面図	9
15 SE 1547 断面図	10	16 六坪の占地	11
17 六坪変遷図	12	18 6 AF I - PQ 区出土軒丸瓦	13
19 6 AF I - PQ 区出土軒平瓦	14	20 6 AF I - PQ 区出土墨書き土器	15
21 6 AF I - PQ 区出土土器	16	22 6 AF I - PQ 区出土木器	18

## 表

頁

Tab1 6 AF I - PQ 区標定点一覧表	3	Tab2 園池出土の植物遺体	5
3 6 AF I - PQ 区主要建物一覧表	8	4 計測座標表	11

# 平城京左京三条二坊六坪

## 奈良郵便局移建計画地発掘調査概報

### I 序章

#### 1 調査の経過

この報告書は、奈良国立文化財研究所が、平城京左京三条二坊六坪にあたる奈良郵便局庁舎移転計画用地(奈良市尼ヶ辻ゴドサ甲669の1)において行なった発掘調査の概報である。

調査は平城京内の大規模開発事業に伴なう事前協議の結果、奈良県教育委員会の行政指導のもとに受益者負担で実施されるはこびとなり、近畿郵政局の依頼によって発掘の作業を同研究所平城宮跡発掘調査部が担当したものである。

まず用地内の遺跡の存否状況を確認するため、予備調査を行うこととして、昭和50年5月30日～7月9日までの約1ヵ月強の期間、本敷地内の南端に70m×5mの東西トレーニング、東端に90m×5mの南北トレーニングを各1本設け計800m<sup>2</sup>について発掘した。その結果敷地中央東寄りで園池の一部を検出し、また園池を画すると思われる塙、および旧河川跡、西方では数棟の掘立柱建物を検出した。このような予備調査の所見にもとづき、池の全容、坪内の建物配置を明らかにするため、昭和50年10月13日より12月23日までの約2ヵ月半の期間、調査面積約3400m<sup>2</sup>について本調査を実施した。両調査を併せて発掘は4200m<sup>2</sup>に及ぶ。

本調査の結果、六坪の中心に大規模な園池が完全な形で発見され、また、この園池と併存する建物・塙・溝・井戸などを検出し、六坪の京内での位置づけ、六坪内の様子が明らかになった。

予備調査、本調査は別記の工程で行なった。また、埋め戻しは、昭和50年12月24日から1月7日まで、遺構の養生を考慮して、各柱穴には真砂土を、池については、石の上、平均厚20cm以上砂で覆つて、その上を土で埋め戻した。なお池の立石の高い部分では、埋め土が外側へ流出しないよう、杭と矢板で土留め施設の施工も一部行なった。また池埋め戻し前に、木樋・木枠など木製品のP.E.G.による保存処理、庭石などのエポキシ系樹脂による剥離防止など保存処置を行なった。

池および建物跡は庁舎敷地の全域にわたるため、現在遺跡の今後の取り扱いについて関係者の話し合いが続けられている。



fig 1. 6AFI-PQ 地区発掘調査状況

予備調査	
5.30	バックホーによる表土・床土排除
6.2～6.9	床土排除
6.10～6.30	遺構検出
7.1	園池写真測量（クレーン車）
7.2～7.5	遣方実測（園池以外）
7.7～7.9	補足調査 土層図作成
7.10～7.15	埋め戻し（ブルドーザー）

本調査	
10.8～10.9	現場小屋建設
10.14～10.15	バックホーによる表土・床土排除
10.16～10.28	床土排除（発掘区東半）
10.29～11.06	床土排除（発掘区西半）
11.04～12.03	遺構検出
12.4	空中写真測量（ヘリコプター）
12.6	現地説明会
12.7～12.9	地上写真測量（園池立面図）
12.10～12.23	補助調査、土層図作成
12.24～12.28	埋め戻し、養生

## 2 調査の概要

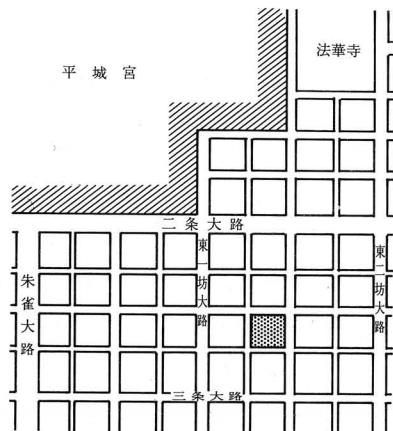


fig2. 平城京左京三条二坊六坪位置図



fig3. 6AFI 地区周辺地形

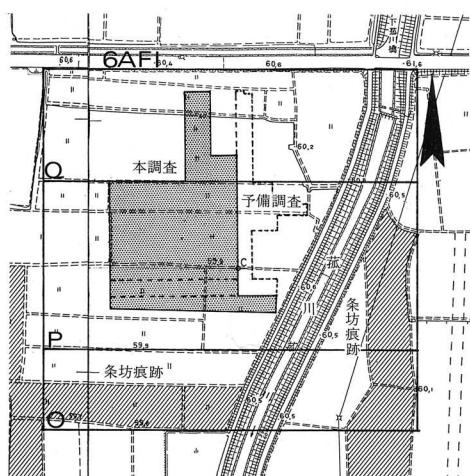


fig4. 6AFI 地区割図

平城京の発掘調査は従来ほとんど実施されたことがなく、碁盤目状の条坊もわずかに残された水田畠畔などから推定されるにとどまり、条坊内に営まれた住居や宅地割りの実態もまったく不明であったが、近年奈良の市街地の拡大に伴ない、開発の事前の調査として行われる機会がふえつつある。朱雀大路（奈良市朱雀大路復原計画・1973～1974年）、左京三条二坊十・十五坪（奈良市新序舎建設予定地・1974）、左京五条一坊四坪（県営柏木基地建設予定地・1974）左京八条三坊（県営住宅姫寺団地建設予定地・1975）などはおもなもので、その結果京内の大路、小路の位置・巾員、坪の区画、坪内の宅地割などがかなり明確になってきた。

今回の調査地は、平城京条坊で左京三条二坊六坪に相当し、その中心部で坪の約7割にあたる面積を占めており、坪内の様子を知る意味で重要な遺構である。発掘ではその内の約 $\frac{1}{2}$ を全面的に調査し、坪の $\frac{1}{3}$ 強の遺構の状況を知ることができた。この地は奈良盆地の北辺に位置する沖積地であり、現在の標高は59.9m前後で、周辺に比較し若干低く、元来低湿地である。また敷地東に隣接して菰川が南流し、東の二坊坊間路、南の条間小路、西の坊間小路など、一部畠畔に条坊地割りの痕跡がたどれる。

調査の結果、京造営前に六坪内を北から南に流动していた旧河川が数条あり、これらは条坊制の施行によって二坊坊間路に沿って堀河として改修したこと、またその内、坪の中心部を南流していた旧河川路を利用して園池が造成され、この園池を中心に堀、建物が計画的に配置されていることが判明した。園池は、全体を石組で固め蛇行した曲池のような形状をし、観賞と同時に、雅宴などの行事に供する庭の機能を持つものと思われる。園池への導水路堆積土中の木簡、池埋土中の土師器、瓦などの遺物の出土状況から、奈良時代を通して存続したことが判明した。

また、園池と併存する建物は、大きく2時期の改修が行われている。この内、園池を取り囲む形に、坪心より各70尺離れて周囲にある堀や、彼方の東山を借景に園池を観賞する園池西方の南北棟などは、園池と一体の機能を持つものとして造成された。なお坪内の井戸・溝なども建物同様、坪心すなわち園池の中心から7尺または10尺の基準方眼により、計画的に配置されている。また、坪内だけでなく、六坪の東・北を限る坊間路、条間路の各巾員も、坪内の割り付けから側溝心々で40尺と推定できた。

遺物は、量的には少ないが発掘区全域から出土した。特に導水路から出土した64点もの多量の木簡と、他の京内遺跡と異なり、いずれも平城宮使用のものと同型式に属する軒瓦が注目される。

### 3. 写真測量

遺構の実測は、主に写真測量によった。写真測量は、精度の均一性、写真の忠実性、測量期間の短縮などの利点を持ち、最近大規模発掘の遺構の測量に利用されている。特に今回のような石敷・石組が多い遺構には有効である。

予備調査では園池の部分のみ、昭和50年7月1日、クレーンでカメラを釣りあげて撮影し、その他は遺方測量によった。

本調査では、昭和50年12月4日に、ヘリコプターにカメラを搭載して撮影した。写真測量は、あらかじめ標定点を遺構面に設置して、位置と標高を計測した後撮影し、この標定点にもとづき遺構図を作成した。成果品として、 $\frac{1}{50}$ モザイク写真と、園池については $\frac{1}{20}$ の遺構図、その他については $\frac{1}{50}$ の遺構図を得た。撮影の仕様は下記の通りである。

なお、池の立面図作成のため、予備調査 Wild C-120・本調査 S MK-40（測量用ステレオカメラ）で地上写真測量を行なった。

#### 撮影仕様

	カメラ	レンズ	フィルム	露出	絞り	高度	変位修正機
予備調査	NAB150	168mm	イルフォード ガラス乾板	1/250秒	11~16	10~15m	ツアイスSEG V
本調査	RMK	153mm	コダック エアロタイプ	1/150秒 1/250秒	8~16	1/20図作成用…15m 1/50図作成用…30m	ツアイスSEG V

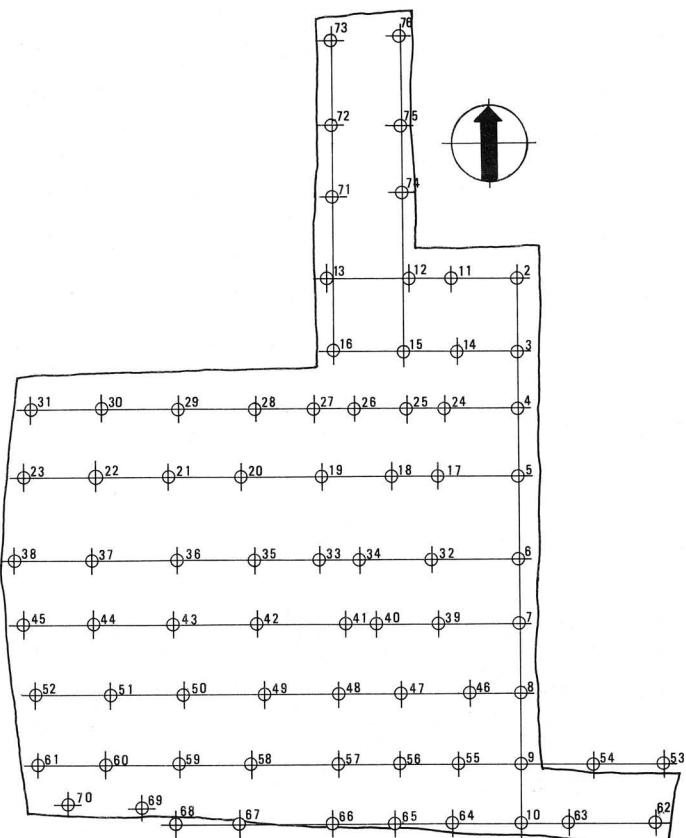


fig7. 6AFI-PQ地区標定点配置図

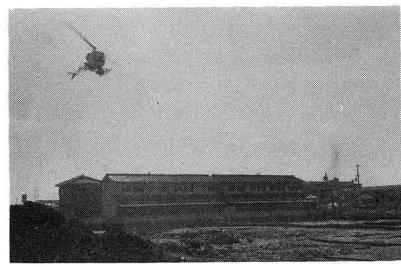


fig5. ヘリコプター空中写真撮影

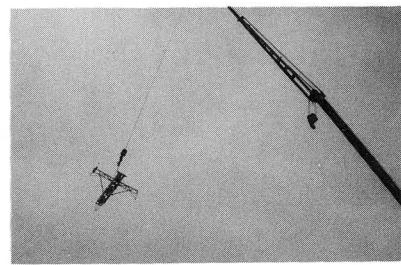


fig6. クレーン空中写真撮影

標定点No.	X	Y	H
B.M. 2	-146318.980	-17841.049	59.320
6	-146348.840	-17841.049	59.492
10	-146376.266	-17841.049	59.483
12	-146318.980	-17852.583	59.832
13	-146318.980	-17861.128	59.677
21	-146340.254	-17868.813	59.816
25	-146332.907	-17852.764	59.690
28	-146332.907	-17868.739	59.896
31	-146332.907	-17892.287	59.492
38	-146348.860	-17892.755	59.492
42	-146355.722	-17868.915	59.851
47	-146363.142	-17854.422	59.264
50	-146363.142	-17877.588	59.501
52	-146370.142	-17893.423	59.487
53	-146376.663	-17826.087	60.193
62	-146376.266	-17826.729	59.364
65	-146376.266	-17854.698	59.399
67	-146376.266	-17870.935	59.834
70	-146380.107	-17889.895	59.433
76	-146294.055	-17853.281	59.580

Tab.1 6AFI-PQ区標定点一覧表

## II 遺 跡

### 1. 遺跡の概観

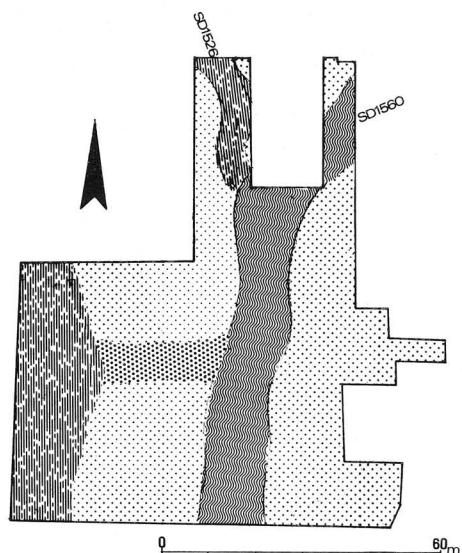
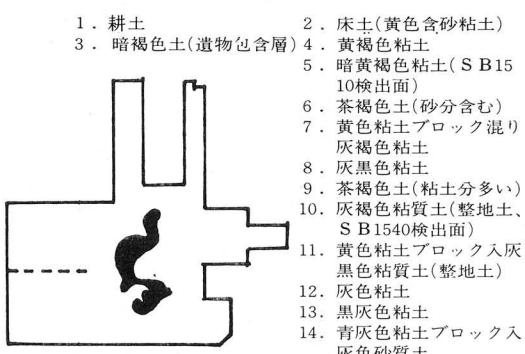


fig 8. 6AFI-PQ 地区地山



H:6000

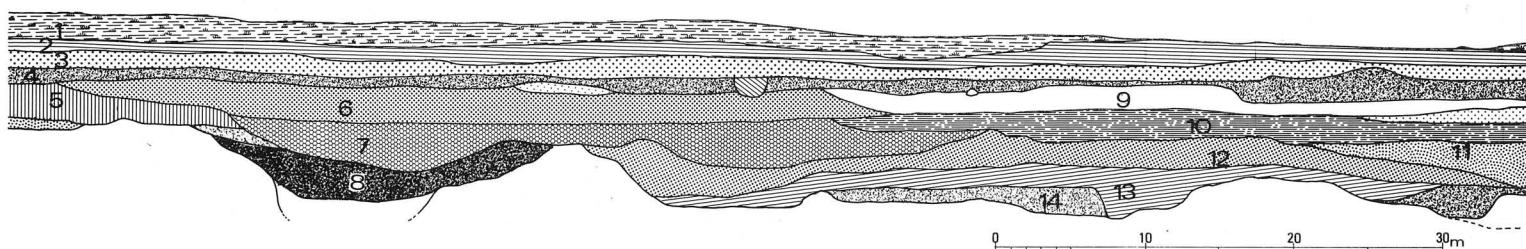


fig 9. 6AFI-P 地区堆積土層図

今回の調査で、奈良以前に北から南に流れる旧河川敷を、発掘区の西端に1条、中央部で2条(S D1526, S D1560)検出した。六坪の東北から中央部を南流するS D1560は、S D1526が廃絶した後の河川であるが、平城京造営前に、S D1526同様、自然堆積により廃絶する。園池は、この旧河川路(S D1560)を利用して造成されたものと考えられる。なお西端の旧河川は、埋めたてた後、奈良時代に2回の整地がみられた。上層は灰褐色粘質土、下層は灰黒色粘土である。

その他の地域は、ほとんど黄褐色粘土(地山)の上に、暗褐色粘土が堆積し、柱穴など大部分は、この層の上面から掘り込む。暗褐色粘土の上面の堆積は遺物を含む暗灰褐色粘質土、黄色粘質土(床土)、暗灰色粘質土(表土)の順になる。なお、発掘区の中央部に、西端の旧河川と中央部の旧河川の間に、巾10m位の黄褐色粘土の整地層がある。この層は、一部池の整地層にもなり、また、この上層からS B1510の柱穴の掘り込みがみられた。遺構面の上面を標高でみると、59m40前後で、北から南にかけて緩い勾配となる。

左京三条二坊六坪内に形成されたおもな遺構は、奈良時代初頭から末期におよぶ期間に属し、整地層や遺構の重複・配置などから大きく2期に区分できる。大規模な園池を坪の中心に配し、建物12棟、塀7条、井戸2基、溝8条、土壙などが坪心から一定の距離をもって計画的に配置されていることが知られ、京内敷地利用の一基準を示すこととなろう。特に、園池西方の建物は、南北棟が多く、近年京内宅地の発掘で東西棟が大多数を占める知見と反するが、園池後方の東山を借景にとりこむ構想になっていることと関連しよう。またA期では、園池を、坪心より各70尺離れた四周の塀で取り囲み、他の部分と区画した利用であるのに対し、B期では、塀が取り外され、園池がより広い空間として利用されている。

なお、奈良以前の遺構として、前述の旧河川3条、溝数条があるが、以降の遺構については、遺構面が削平されたのか、園池廃絶後この地の利用がなかったのか、顕著なものはみられなかった。

## 2. 遺構

本発掘区において検出した主な遺構は、予備調査、本調査合わせて、園池1、建物12棟、堀7条、井戸2基、溝8条、土壙などである。以下、先ず坪の中心に位置する園池とその関連施設について述べ、次いで、園池と併存する堀・建物・溝・井戸などの順に遺構の説明を行なう。

**S D 1560**：平城京造営以前に、六坪の東北から坪の中心部を南に流れている河川である。旧河川 S D1526が廃絶した後、流れていた河川で、北は導水路 S D1525下層に、南は排水路 S D1466下層に河川の堆積層を確認した。京造営時には自然堆積により廃絶していたが、園池 S G1504は恐らく、この河川路を利用して造成されたものと考えられる。

**S D 1525 (P L. 6)**：園池に導水するための導水路である。園池同様旧河川路 S D1560を利用した巾4～7mの溝で、園池の手前で滞留し、木樋S X1523により園池へ導水している。この導水路は、平城京造営時に、左京三条二坊の坊間路の道路沿いに、堀河の役目を持たせるべく造成された菰川に通じるものと思われる。菰川と導水路の接点には、水量調節の意味で堰のような施設が設けられたものと思われるが、今回の発掘ではその地点におよばなかった。なお、この導水路の堆積土下層より、造営時に廃棄されたと思われる多量の加工木片と共に、「和銅」の年紀を持つものの他64点もの多くの木簡が出土した。

**S X 1523 (P L. 8)**：導水路 S D1525より園池へ水を引く木樋暗渠である。木樋は、長さ5mの一木（巾12cm、深さ10cm）を凹型にくり抜き、上に木蓋をのせる。木樋の溝は先端（北端）では木口まで達せずに止まっており、1mほど露出させて、導水は端近くで蓋をくり抜いた部分から上面で注ぎ入れる構造になっている。また取入口には、木樋の両脇に1mの間隔で、2本の小角柱（一辺15cm面取り）が検出された。導水のための関連施設であろうが、構造の詳細は知り得ない。なお、この小角柱掘方内に導水路の堆積土が見られたことや、木樋掘方が上面から見えないことから、S X1523は導水路より後の施工によるものと考えられる。

遺構には一連番号を付して、その前に S A : 築地・柵・土壙、 S B : 建物、 S C : 廊、 S D : 溝、 S K : 土壙、 S X : その他、などの分類番号を標記する。

遺構の実測は国土方眼座標にしたがい、高さの基準は標高である。

- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 1. 耕土                | 2. 床土(黄色含砂粘土)       |
| 3. 灰褐色砂質土(遺物包含層)     | 4. 茶褐色粘土(遺物多い)      |
| 5. 黒褐色粘土             |                     |
| <b>S D 1525堆積層</b>   |                     |
| 6. 暗灰色砂質土            | 7. 灰色粘土ブロック入灰緑色砂質土  |
| 8. 灰黒色粘土             | 9. 紹状砂含む灰黒色粘土(木片多し) |
| <b>S D 1560堆積層</b>   |                     |
| 11. 灰緑色砂質土           | 12. 暗青灰色含砂粘土        |
| 13. 灰緑色砂質土           | 14. 暗灰緑色粘質土         |
| 15. 砂礫               | 16. 砂礫              |
| 17. 紹状灰黒色粘土狭む砂       | 18. 淡黄色粗砂           |
| 19. 青灰色細砂            | 20. 紹状砂含む灰緑色粘質土     |
| 21. 青灰粗砂             | 22. 紹状砂含む灰色粘質土      |
| 23. 砂と灰黒色粘土互層        |                     |
| 24. 砂礫               |                     |
| 25. 紹状の灰黒色粘土を含む暗黄色粗砂 |                     |
| 26. 暗灰色粗砂            |                     |
| 27. 暗灰緑色粘土           |                     |
| 28. 灰黒色粘土            |                     |
| <b>S D 1526堆積層</b>   |                     |
| 29. 砂礫               |                     |
| 30. 灰色粗砂             |                     |

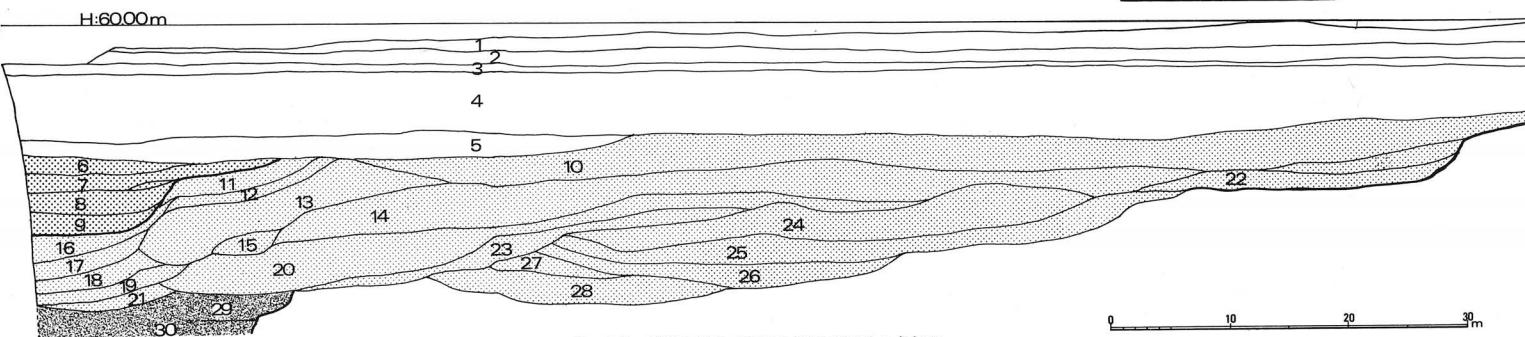
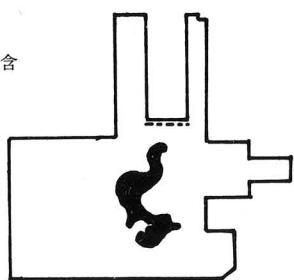


fig 10. SD1560.1525.1526 堆積土層図

### 1) 園池に使用された岩石（庭石・玉石・礫）

縞状片麻岩（両雲母片麻岩）、花崗岩類、塩基性変成岩類（変輝緑岩）、三笠安山岩、ホルンフェルス、チャート、流紋岩質火碎石類（石英斑岩）などで、基本的に奈良盆地東縁部地域で採取可能なものばかりである。

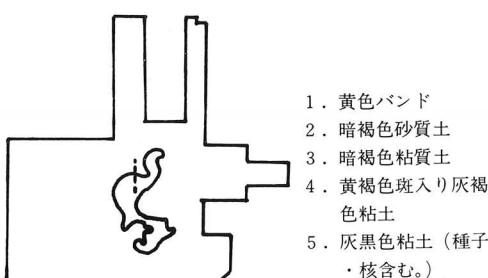
種類	出土部位	数量	習性	万葉植物名
クロマツ① <i>Pinus thunbergii</i> PARL.	球果	61	常緑針葉喬木 (食用)	松、待、麻都
モモ <i>Prunus persica</i> BATSCH	核	5	落葉広葉喬木 (食用・薬用)	桃
ウメ② <i>Prunus mume</i> SieZ	核	2	落葉喬木 (薬用)	宇米、有米、梅
ゼンダン <i>Melia azedarach</i> L.	核	7	落葉喬木	相布・阿布知
"	種子	3	"	安不知
ヒルムシロ <i>Potamogeton distinctus</i> BENN.	果実	1	多年草(水生植物)	多波美豆良
アラモダカ <i>Alisma canaliculatum</i> A.Br et Bouché	種子	1	多年草(水生植物)	宇能波奈
ツツジ <i>Deutzia crenata</i> S.et Z.	蒴果	9	落葉灌木	
ヨキヅル <i>Actinidia lobata</i> Max.	種子片	3	一年生つる草(水辺植物)	

Tab 2. 園池出土の植物遺体

### 2) 園池堆積土の花粉分析

園池最下層の堆積層、灰黒色粘土に花粉胞子化石がきわめて多く含まれていた。特に *Pinus* (マツ属) *Cryptomeria* (スギ属) が多く、また水生の *Persicaria* (タデ属) *Gramineae* (イネ科) や、*Picea* (トウヒ属) *Tsuga* (シガ属) *Quercus* (コナラ亜属) *Fagus* (ブナ属) など約40種類におよぶ。なお、池の埋土の灰褐色粘土層では、マメ科のアズキ、ゴマ科のゴマ、タデ科のソバ、アブラナ科の一種など、当時の栽培植物の花粉化石が認められた。

\* この番号は7頁下段の関連文献番号を示す。  
以下同じ。



**S G 1504**：園池は、平均巾15m、延長55mあり、池全体を石組で固め、曲池のような形で蛇行している。導水口、溢水口の高さから推定すると、水面は巾の広い所で5~6m、狭い所で2m、平均3m前後である。水深は、水面の広い所でもっとも深く25cm、平均20cm位の浅いものと考えられる。<sup>⑧</sup> 水際は、一部倒壊している所もあるが、全面玉石を一列に立てて据えつけている。水面は、この立石の中ほどを満たす。立石から陸に向って5~6°のゆるい勾配で、巾20cm前後の偏平な玉石を敷きつめている。玉石に続き、池の周辺には、こぶし大の礫を並べ地表を保護している。玉石・礫とも、曲部あるいは水面が狭くなる部分で、巾広く敷きつめている。また、底石の欠損している箇所でみると、池底は全面粘土で覆っているものと思われる。庭石は、水蝕ある褶曲を持つ石英質片麻岩を水辺に、花崗岩、一部安山岩などを陸に使用し、池汀の変化する突出部や湾曲の開始される点などに集中して配置し、自然順応の趣きをみせている。特に西岸の最初の突き出し部で、突き出した石組をうける形で岩島を池中に配した点や、岩島と池中央部東岸の石組がともに、池に向って気勢を示すよう斜めに据えられている点など興味深い。なお池中の堆積土は、底石の上に20~30cmの厚さで種子・核を含む灰褐色粘土がある。<sup>(Tab-2)</sup> この層は、導水施設から流入したものではなく、池を使用した時期に自然堆積したものと思われる。また、この灰黒色粘土の上層には、厚さ30~40cmの黄褐色斑入り灰褐色粘土が、池の埋土としてある。この層に含まれる、土師器、瓦などの編年から、園池の廃絶は、奈良末期に比定できる。(P.L.10.11.12.13)

次に池の中の細部意匠をみてみると、

**S X 1524 (P.L.11)**：池の北端にある東西6m、南北1mで、50~60cmの立石で囲んだ石組構造。立石は、西側では抜き取られているが、木樋暗渠により流入した水を、いったん滞水浄化させた後、上水を池へ導水するための施設と考えられる。

**S X 1468 (P.L.11)**：池縁から直角に陸に向って、両側に玉石を巾1.2m、長さ4mで並べる。これはS B 1470にも近接していることから、後世の舟入りの施設を思わせる。しかし、池全体の水深や、この部分の水深が10cmに満たないことから、実用には供し得ないものと考えられる。

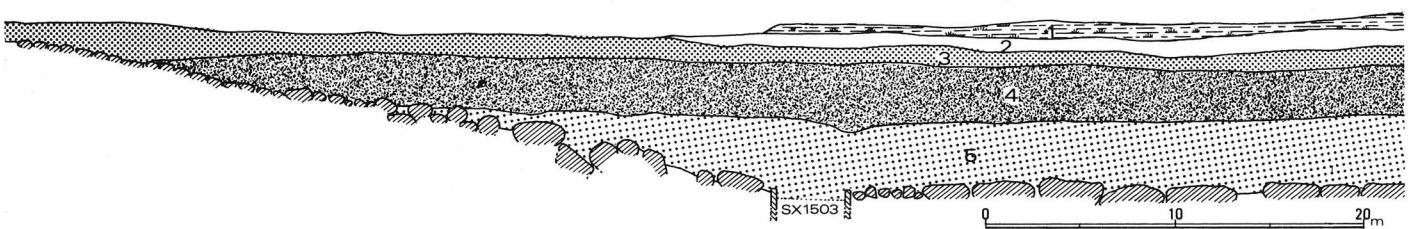


fig 11. 池堆積土層図

**S X 1503 (PL. 9)**: 池庭に木組で仕切りを施えたもので、底板を4枚敷き、その上に側板（長辺80cm、短辺30cm）を枠で直に組み合わせたものである。側板の上面に枘穴があり、もう一枚上に組み合せたものと考えられる。側板は2枚つなぐと、高さは30cmとなり、底石より10cm高いが、木組自体は水面下になる。この施設は、水際に位置することや、花粉分析の結果を考えると、木組の中に土を入れ、水生植物の栽培に使用されたものであろう。

**S X 1463 (PL. 9)**: S X 1503と同様の施設で、底板3枚の上に側板を2段組み合わせている。S X 1503と異なり側板は直交せず、斜めに据えている。また側板の損耗がひどく、側板上面の枘穴は確認できなかつた。

次に池の排水をみると、園池南辺で壁状に、岸に沿って一例に並ぶ立石の間から、溢流する溝（S D1465）と、池底から木樋暗渠（S X1464）によって排水される溝と2種類ある。

**S D1465**: 池の南端西よりに階段状に石を壘んだ溝で、池から溢流する水を、排水溝S D1466に導く溢水溝である。

**S X1464 (PL. 8)**: 溢水部の下に貫通する、外法寸法20cm×20cm、長さ2.5mの木樋で、排水溝S D1466に開口する。構造は取入口の木樋と同様、蓋先端部に径12cmの丸い穴を穿っている。なお取入口木樋蓋と、S X1464の蓋の高低差は約30cmである。

**S D1466**: 池の溢流水と、木樋（S X1464）から流れ込む水を受けて南へ流す排水溝である。巾7尺（2.1m）で、両側に径20~30cmの玉石で一段護岸している。

以上、園池は、その形状、水深および関連施設などから判断すると、観賞と同時に曲水宴などの行事雅宴に利用できる実用面が両立したものと思われる。因みに、池底の勾配は、取入口と溢流口で $\frac{1}{300}$ 、取水口と排水口で $\frac{1}{150}$ になる。また、池の堆積層が薄いことや、土器の出土量が少なく、小片がほとんどであることから池は常に清掃されていていたか、池に水をはって使用された期間が行事・雅宴に限定されたものかも知れない。

今回検出の園池の技法など関連記事を奈良時代の文献資料より、また平安時代の作庭の基本的な理念と技法を記した作庭指導書「作庭記」にみると、下記のようなものがある。

- ①「松影の清き浜辺に玉敷かば君きまさむか清き浜辺に。」(万葉集・卷19、天平勝宝4年11月8日、在於左大臣橘朝臣宅)
- ②「梅の花咲き散る春の永き日を見れども飽かぬ磯にもあるかも」(万葉集・卷20、天平宝字2年2月、式部大輔中臣清麻呂朝臣の宅に宴する歌)
- ③「壬午 於宮西南。新造池亭。設曲水宴。……」(続日本紀卷24、天平宝字6年3月の條)
- ④「天平二年三月丁亥。天皇御松林宮。宴五位以下。引文章生等令賦曲水。……」(続日本紀卷10)
- ⑤「対曲裏之双流……林亭問我之客去來花辺。池台慰我之賓……」(懷風藻、正三位式部卿藤原朝臣宇合。五言暮春曲宴南池并序)
- ⑥「……対酒当歌。……一曲一盃。……烟霞蕩而滴目。園池照灼。桃李咲而成蹊。……」(懷風藻、從三位兵部卿兼左右太夫藤原朝臣麻呂 五言。暮春於第園流置酒。)
- ⑦「大河のようは、そのすかた竜蛇のわけるみちのことくなるへし。先石をたつことはまつ水のほかれるところをはじめとして、おも石のかとあるをたてて、その石のこはんをかきりとすへし」(作庭記)
- ⑧「池はあさかるへし。……池をは常さらきらふへき也。」(作庭記)

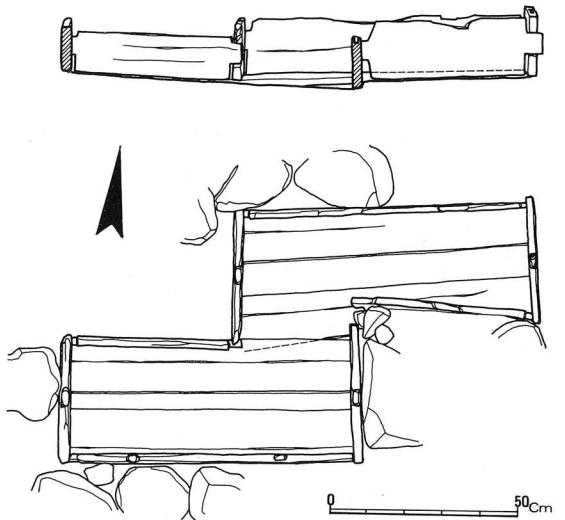


fig 12. SX1503 平面・断面図

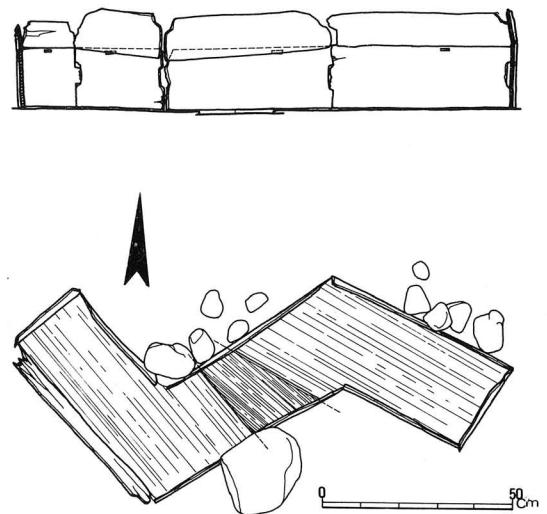


fig 13. SX1463 平面・断面図

次に、坪心より各70尺に位置し、園池を画する四周の堀と園池西方の建物について説明する。

**S A 1500 (P L.5)**：東西方向の堀で、園池北部の石組遺構 S X1524をはさんで15間分検出。柱痕跡をよくとどめ、南北方向を長辺に1mのほぼそろった方形の掘方を持っている。柱間は7尺を基本とするが、西端から2間目は10尺を超え、ここに門を開いていた可能性がある。園池西方部分、東端の柱掘方は、園池周辺のバラス敷きを取り除いて造られており、園池と一体となった造営計画がうかがわれる。

**S A 1538**：S A 1500の延長と考えられる堀であって、S B 1540の北側柱列に重なって、その下層から検出した。S A 1500の西端まで、6間分であるが、柱間は10尺で多少の出入りがある。

**S A 1536**：北端はS A 1500にとりつき、南端は南北棟S B 1510の東側柱列につながる南北方向の堀である。S B 1510まで7間。北から4間分の柱間は8尺等間であるが、次の2間は9尺、S B 1510との間は13尺ある。柱掘方は長辺1mほどの矩形を呈する。

**S A 1473 (P L.5)**：発掘区の南端を東西に伸びる堀である。S B 1510の東側柱列の取り付きから東へ4間で、園池排水溝S D 1466に達し、S B 1470の東側柱列の延長と端をそろえて終わる。排水溝の対岸は、2条の素掘りの東西溝、S D 1451、1453に狭まれた道路S X 1559に比定される部分にあたり、柱穴の検出を見ず、この堀は排水溝をこえて、東へ延長することはない。柱掘方は、おおむね南北方向にやや長い一辺70~80cmの方形で、中に軒平瓦(6667)を含むものがあった。

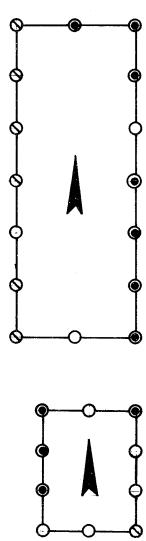
**S A 1483**：南北方向の堀で、掘方の状況などはS A 1500に類似している。S D 1453の南まで、18間分とすれば柱間はほぼ7尺等間になる。柱痕跡をとどめる4間分の小穴S A 1455が、やはり7尺等間で重複している。この堀と園池の間の巾7~15mの区域には、遺構の検出はなかった。

**S B 1510**：桁行6間・梁行2間、柱間10尺等間の掘立柱建物である。掘方は一辺1mの正方形であり、南から2間目の中央柱筋に、やや小さい掘方の柱穴があって、仕切りとみられる。東側柱列には、一様に径30~40cmの柱痕跡があり、これに対し西側柱列は建物の外側へ向けての、掘方から西に張りだした柱抜き取り穴が明瞭である。

**S B 1505 (P L.5)**：園池の北西に、きわめて近く接して建てられた、梁行2間(8尺等間)・桁行3間(7尺等間)の南北棟建物である。東南隅の柱穴はS A 1500の場合と同じく、園池周辺のバラスを取り除いて掘方をつくっている。遺構の中央及び西側柱列近辺には多数の土壙があるが、いずれも柱穴より新しい。

建 物	棟方向	規模・底	桁行m(尺)	梁行m(尺)	廂m(尺)
S B 1470	N-S	5×2	11.8 (40)	4.8 (16)	-
" 1471	N-S	3×2	4.7 (15)	3.5 (12)	-
" 1472	N-S	3×2	6.3 (21)	4.2 (14)	-
" 1476	E-W	3×2.南	7.2 (24)	4.8 (16)	2.7 (9)
" 1505	N-S	3×2	6.3 (21)	4.8 (16)	-
" 1510	N-S	6×2	17.7 (60)	6.0 (20)	-
" 1540	N-S	6×2 四面?	17.8 (60)	6.0 (20)	3.0 (10)
" 1542	E-W	4×2×2	10.5 (36)	5.4 (18)	-
" 1550	E-W	3×2.南	6.3 (21)	4.8 (16)	2.7 (9)

Tab.3 6AFI-PQ地区主要建物一覧表



● 柱根 ◎ 柱痕跡 ◆ 柱抜取痕跡 ○ 柱穴のみ □ 推定

**S B1470**：園池の南西に位置する、桁行5間・梁行2間、柱間8尺等間の南北棟建物である。東側柱列の北から2番目の柱穴は、後の深い土壌のために破壊されている。この東側柱の中央間へは、園池周辺のバラス敷きが伸びてきており、また建物前方は、園池につき出した半島のようになっていることから、園池との密接な関連性がしほれる。

**S B1471**：桁行3間5尺等間、梁行は2間（6尺等間）の南北棟建物。堀方も小さく、東側柱列が、S B1470の西側柱列と重複するが、この遺構の方が新しい。

**S B1472**：S B1471の南にある、桁行3間、梁行2間、7尺等間の南北棟である。北側妻柱は検出しない。S B1471と西側柱列の柱筋をそろえ、同時期とみられる。S A1473とは近接しすぎているため同時存在はないものと思われる。

**S B1540 (P L.5)**：桁行8間、梁行4間、柱間10尺等間の礎石建物と推定される建物である。建物北辺に、近世の磁器を含む土壌や野つぼなどがあり、後世の攪乱が甚しく、根石または根石抜き取り穴が一部確認されたにすぎず、礎石は皆無で、基壇痕跡も確認できなかった。また、この地が軟弱な整地層のため、石群下には必ず、幅10~20cmの板が一枚あるいは数枚入れられていた。なおこの整地土中に奈良時代後葉の土器が多く含まれていた。

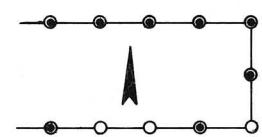
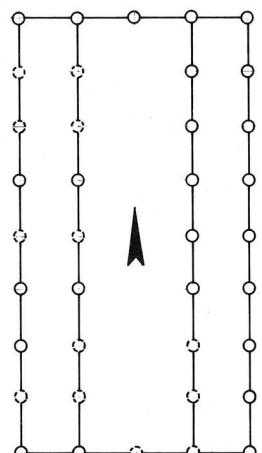
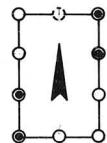
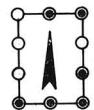
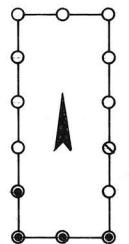
**S B1542 (P L.7)**：S B1540の下層から検出した梁行2間、桁行5間以上の掘立柱東西棟建物で、柱間は9尺等間である。柱痕跡に炭化物を多く含んでいた。北および南の側柱列がS B1540の北から2列目、4列目の柱筋で、柱穴の重複がみられ、S B1540より古いことが確認できた。

**S B1519**：発掘区の西端で柱穴を4個検出した。柱間は7尺で、西側に柱穴の断面があらわれており、いずれも耕土、床土、遺物包含層のさらに下層から掘り込まれている。S B1510と同じ層位である。

**S B1517**：S A1473の西端に、10間目西でとりつくと思われる建物で、柱掘方はS A1473よりやや小さい。発掘区の東西隅に、柱掘方を南北に2個（柱間10尺）検出、西壁面に1個（柱間10尺）確認したに過ぎない。

この東に接して、径1.5m深さ80cmほどの土壌S K1516を検出した。瓦片が相当数出土している。

**S E1511 (P L.6 fig 14)**：発掘区の中央南端、S A1473の南に検出した素掘りの井戸である。平面は径2mの円形で、遺構面より深さ1.7mを測る。埋土は暗灰色粘土で、面戸瓦や土器片を多少含んでいる。



- |         |             |
|---------|-------------|
| ①茶褐色粘質土 | ④暗黒色粘土      |
| ②灰褐色粘質土 | ⑤青灰粘土混灰黒色粘土 |
| ③灰黒色粘質土 | ⑥灰色砂土       |

H:59.60m

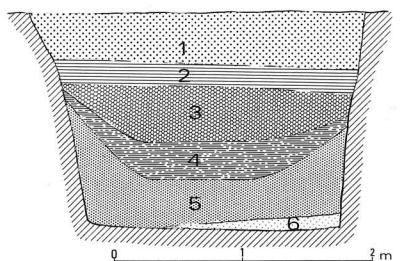
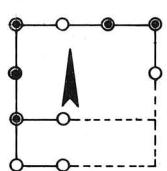
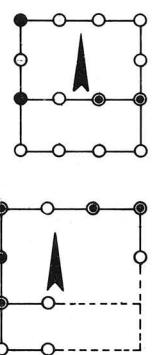
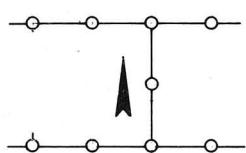


fig 14. SE-1511 断面図

次に園池北方および東方の遺構について説明する。



- |                           |                          |
|---------------------------|--------------------------|
| 1. 茶褐色ブロック混り<br>灰黄色粘土     | 2. 黒褐色粘土                 |
| 3. 淡灰黒色粘土                 | 4. 青灰色粘土                 |
| 5. 磯含む青灰色砂                | 6. 砂混り灰黒色粘質土             |
| 7. 淡灰黒色粘土混り砂<br>質土        | 8. 砂礫混り暗灰黒色粘<br>土        |
| 9. 暗灰黒色粘土                 | 10. 灰緑色粘土ブロック<br>含む灰黒色粘土 |
| 11. 淡灰黒色粘土混り砂<br>質土       | 12. 灰黒色粘土                |
| 13. 黒褐色粘土                 | 14. 青灰色砂混り灰黒色<br>粘土      |
| 15. 青灰色粘土ブロック<br>入暗灰色含砂粘土 |                          |

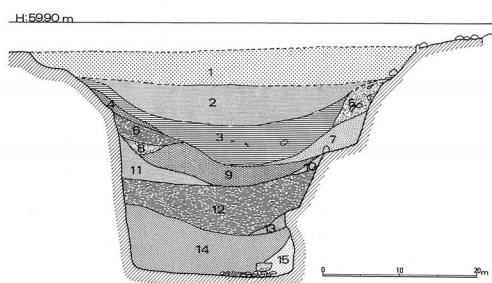


fig 15. SE1547断面図

**S B 1552 A, B** : 二つの東西棟が、ちょうど東西に 1 間分重なり合っていると考えられる。2 棟とも梁行は 2 間、柱間は 10 尺であり、東西は発掘区の外にある。西側の A 建物は、東西に長い 1 辺 1 m ほどの柱掘方を持っている。東側の B 建物は、柱穴の切り合いから A より新しい。柱掘方は A より小さく、かつ南北に長く 1 辺 70 cm ほどである。

**S B 1550** : S B 1552 の南部に重複する東西棟である。身舎桁行 3 間 (7 尺等間)・梁行 2 間 (8 尺等間) で、9 尺の庇を持つ。身舎の西北隅、西南隅の柱穴には柱根が残存していた。西南隅の柱根の径は 30 cm 余を測り 40 cm 以上の長さをとどめる。

**S B 1476** : S A 1455 の東に位置する東西棟である。身舎桁行 3 間・梁行 2 間、南面に庇を持つ。柱間は身舎が 8 尺等間、庇は 9 尺とやや広い。

**S A 1557** : S D 1545 の南に位置する東西塀で、柱間は 4 ~ 5 尺と小さく、柱穴も方 20 cm 程度の小穴である。柱穴は 1 つを欠いて 4 間分検出した。柱通りはそろわないが S B 1550 の北側柱から 10 尺北に位置し、この建物と関連するものと考えられる。

**S A 1554** : 上記の塀の南に位置する東西塀で、柱間は 5 尺、柱穴は浅く、長径 40 cm 程のだ円形を呈している。4 間分を検出したにとどまる。

**S D 1545** : 幅 70 ~ 80 cm の素掘りの東西溝である。溝底は西の方が高く、菰川流路の方向へ東流していたものと思われる。後述するようにな、六坪内で占める位置から見て、これを三条条間路に面する築地内側の溝に比定できる。また溝埋土は暗灰色砂質土で、この中に数点の軒丸瓦片が出土しているが、形式は判明しない。

**S E 1547 (P L. 6)** : 導水路 S D 1525 の西方に位置する素掘りの井戸で径は 2 m 深さは遺構面から 3 m 弱である。底は灰青色の砂で、軒平瓦 (6721-C) や土器片が堆積した状態で出土した。また上層の暗灰色粘土の埋土中には、奈良末から平安初頭の土師器杯や、軒平瓦 (6663)、壇などが出土した。この井戸の南に、井戸を囲むようにバラスの堆積があり、やはり同様の壇が含まれていた。またこの井戸の東に、井戸の排水路と考えられる東西溝 S D 1546 がある。

この他の遺構として、併行する 2 本の東西溝 S D 1453、1451 より古い時期の斜行する溝 S D 1456、S A 1500 と重複して走り S A 1500 より古い時期の東西溝 S D 1527、斜行溝 S D 1532 などがある。

### 3. 占地と時期区分

#### a. 占地 (fig 16)

調査で検出した奈良時代の遺構が、平城京の条坊のなかでどのように位置づけられるか、また坪内の割付けはどのようにになっているかをみてみる。

先ず、六坪の東を限る二坊坊間路の心は、左京三条二坊十五坪で確認した坊間小路心から条坊計画によると $450\text{尺} \times 0.295\text{m} = 132.75\text{m}$ となる。（基準尺 $0.295\text{m}$ は、平城宮39次調査の東一坊大路心の実測値と、86次調査の二坊坊間小路心の実測値の差 $400.239\text{m}$ を、朱雀大路の国土方眼方位に対する振れ $N15'41''W$ の修正を加えた値、 $398.249\text{m}$ を条坊計画寸法 $1350\text{尺}$ で除した値。以下の数値は全て、振れを考慮している。）二坊坊間路心と、6坪検出の東堀SA1455間の距離を計測すると $47.224\text{m}$ （ $\div 0.295 = 160.08\text{尺}$ ）の値を得る。また六坪の北を画する三条条間路心は、39次調査確認の二条条間大路心から、条坊計画によると $1800\text{尺} \times 0.295\text{m} = 531\text{m}$ となる。三条条間路心と六坪検出の北堀SA1500間の距離を計測すると $47.920\text{m}$ （ $\div 0.295 = 160.305\text{尺}$ ）の値を得る。

条間路、坊間路心から六坪内の北堀・東堀まで、それぞれ $160\text{尺}$ の等距離にあること、また東西堀間（SA1455～SA1536）、南北堀間（SA1473～SA1500）がともに $140\text{尺}$ であることから、条間路、坊間路の巾員（溝心々）を $40\text{尺}$ と推定すると、坪の計画巾（ $450\text{尺}$ ）一小路 $\frac{1}{2}$ 巾（ $10\text{尺}$ 、86次、西隆寺調査で確認）一条間路または、坊間路 $\frac{1}{2}$ 巾（ $20\text{尺}$ ）＝ $420\text{尺}$ となる。

坪の地割りを方 $420\text{尺}$ とすると、6坪内の東・西・南・北の堀が坪を、東西、南北にそれぞれ3等分することになる。また坪のセンターが、ほぼ園池の中心に位置することや、建物が坪の中軸線に、各堀に柱通りを合わせて計画的に配置されていることが判明した。

#### b. 6坪の時期区分

調査によって検出した六坪中心部の遺構は、他の調査済の京内遺跡に比べ、大規模な園池を坪の中心に位置するため量的に少なく、重複関係も少ないことが明らかとなった。このような遺構を時期的に分類すると、遺構の大部分は暗褐色粘質土面で検出し、整地層の違いなど層位による時期区分は多くみられないこと、また建物の重複関係も少ないとから、園池を中心とした、建物の規則的な配置関係、建物間隔を中心に時期区分を行なった。

その結果、大きくA. B 2時期に区分することが出来る。(fig17)

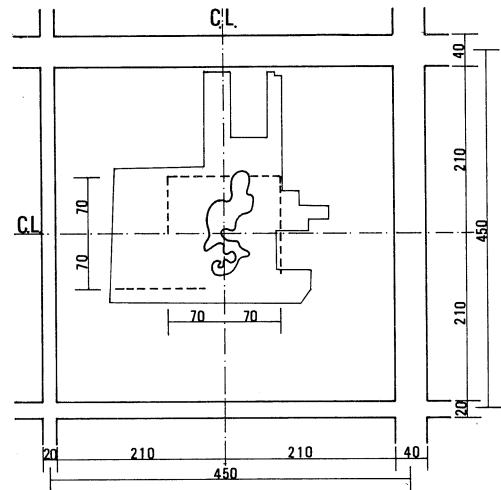


fig 16. 六坪の占地

地 点 名	X	Y	備 考
東一坊大路心	-145757.263	-18054.064	39次調査 実測 値
二条条間大路心	-145751.977	-18027.326	"
二坊坊間小路心	-146192.580	-17653.825	86次調査 実測 値
朱雀門心	-145994.500	-18586.320	16次調査 実測 値

Tab 4. 計測座標表

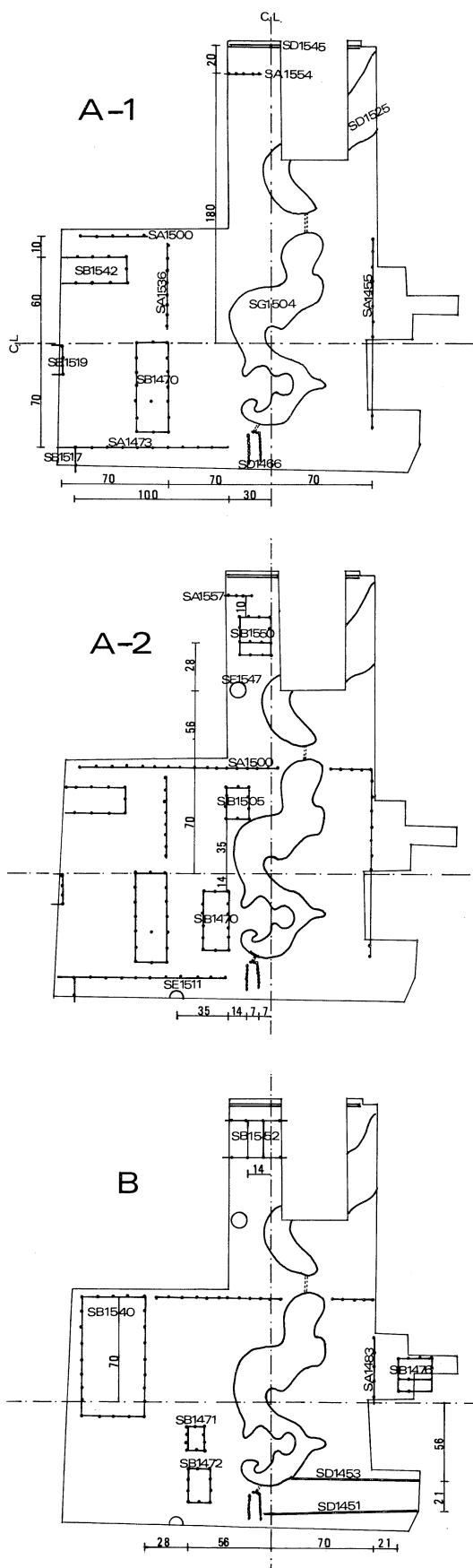


fig 17 六坪変遷図

**A期**: 建物7棟、塀6条、井戸2基、溝2条、園池がこの期に属する。園池がまず坪の中心部に造成され、これを囲む形に70尺(7尺×10間)の等距離に、東、西、北、南の4塀が設けられる。S B1510、1519はともに北側柱を坪の東西中軸線にそろえ、南北中軸線より、それぞれ70尺(7尺×10間)、140尺(7尺×20間)西に位置する。S B1542は西側柱が発掘区域外となり確認できなかつたが、東西5間と推定すると、南北中軸線より140尺に位置する。またS B1550の東側柱は南北中軸線にのり、南側柱は東西中軸線より84尺(7尺×16)西に位置する。南塀S A1473は南北中軸線より西30尺で始まり、この位置でS B1470の東側柱、S B1505の西側柱に柱通りをそろえる。また南塀は10間目(10尺×10間)でS B1517にとりつく。

A期のうち、北塀S A1500は7尺等間で方眼北に対しN O°11'27" W振れるのに対し、南塀S A1473は10尺等間でN O°34'22" Eと逆方向に振れることから、A期内でも2期の増改築を考えられる。因みに、南塀と方位をそろえて、10尺方眼で計画されているものをみると、(A-1期)、S B1517(130尺)、S B1519(140尺)、S B1510(70尺)、S B1542(60尺)、S A1554(180尺)、S D1545(200尺)である。それ以外のものは全て北塀と方位をそろえ、7尺方眼の計画にのる。(A-2期)、特に7尺の計画は、建物、塀に限らず、溝(S D1451、1453、1466)、井戸(S E1511、1547)にも適用される。

この時期では、西塀S A1536の内側に南北棟S B1505、1470、1510の3棟が、園池を観賞または使用する建物と考えられる。特にS B1505は池岸の石敷部に東南隅柱を立て、池台、池亭のような性格を持つものかも知れない。またS D1545は坪心より200尺に位置し、210尺の坪計画巾から考慮すると、坪を画する築地または塀の内側の雨落溝に相当する。

**B期**: この時期も前期の計画的な配置を踏襲し、北塀S A1500の後に、北側柱を合わせて、S B1540を中軸線から西84尺(7尺×12)の位置に造成している。また中軸線から西56尺(7尺×8)の位置にS B1471、1472の西側柱をそろえ、東91尺(7尺×13)の位置にS B1476の西側柱をそろえて、それぞれ計画されている。なおこの時期にはS A1455が取り外され、S B1476の目隠しにS A1483が造成されたものと考えられる。

この期の主屋は、今回検出建物の内、最大規模を持つS B1540で、主屋から園池が広く見渡せるよう、S A1536、S B1505は廃絶している。園池を含んでより広い空間として利用されている。

なお建物の柱穴の重複関係から、S B1542よりS B1540が、S B1470よりS B1471の方が、それぞれ新しいことが判明した。

## II 遺物

### 1. 瓦搏類

瓦類は発掘区全体から出土しているが、量的には少ない。軒瓦・丸平瓦のほか面戸瓦・搏などが出土した。軒瓦は軒丸瓦9型式43個体、軒平瓦5型式56点である。なお、記述にあたっては、奈良国立文化財研究所で設定した型式番号を使用する。

#### 軒丸瓦 (fig 18. PL.14)

6133B 内区に単弁13弁蓮華文を配し、外区内縁に珠文をめぐらす。外縁は素文で丸味をもつ。中房には1+6の蓮子を配する。

6134B 内区に単弁9弁蓮華文を配し、外区内縁に珠文をめぐらす。外縁は素文で低い斜縁である。中房には1+6の蓮子を配する。

6225 内区に複弁8弁蓮華文を配し、外区外縁に凸鋸歯文をめぐらす。内外区を画する界線は二重圈線である。中房は大きく1+6の蓮子を配する。

6227 同じく二重圈線の複弁8弁蓮華文である。中房は凹状となり、瓦当面全体が平坦である。

6282B 内区に界線で囲んだ複弁8弁蓮華文を配し、外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。裏面の接合部には内外面ともに粘土を厚くあてる。

6285 内区に界線で囲んだ複弁8弁蓮華文を配し、外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。中房はやや凸面状となり、1+6の蓮子を配する。破片の観察から、范型に粘土をつめる順序や丸瓦部の接合方法が判る。粘土は外区→内区の順でつけ、全体に円盤状の粘土をあて裏面を形成する。つぎに、裏面の接合部にえぐりを入れ、丸瓦には凸面先端にキザミを入れ取り付ける。

6316Db 内区に間弁のない複弁8弁蓮華文を配し、外区内縁に珠文をめぐらす。外縁は素文で低い直立縁である。中房には1+8の蓮子を配するが、元来、1+4の蓮子(6316Da)に彫り加えたものである。裏面の接合部には粘土を厚くあてるため、浅い弧状となる。

この他、再使用されたとみられる7世紀末の軒丸瓦が出土している。藤原宮式とよばれる6274、6279Aと面違鋸歯文珠文縁複弁蓮華文をもつ3型式である。

#### 軒平瓦 (fig 19. PL. 14)

6663F 花頭形の中心飾りの左右に3回反転の均整唐草文を配する。外区と内区の界線は二重圈線である。各单位の唐草文は上下の界線から発し、第3単位の主葉は脇区界線にとりつかない。曲線顎である。平瓦部瓦当近くを凹面は横方向に、凸面は縦方向にナデる。

6664F 花頭形の中心飾りの左右に3回反転の均整唐草文を内区に配し、外区に珠文をめぐらす。段顎である。平瓦部凹凸面ともに横ナデする。

6667A 三葉形の中心飾りの左右に4回反転の均整唐草文を配し、外区に珠文をめぐらす。段顎である。平瓦部凹面は縦方向にナデ、全面に布目を消す。凸面は縦方向に繩タタキし、顎は横ナデする。

6721C 小字型の中心飾りの左右に5回反転の均整唐草文を配し、外区上下に密に珠文をめぐらす。曲線顎である。平瓦部凹面には布痕が残るが、瓦当近くを横ナデする。凸面は斜方向の繩タタキの後、縦にヘラケズリする。

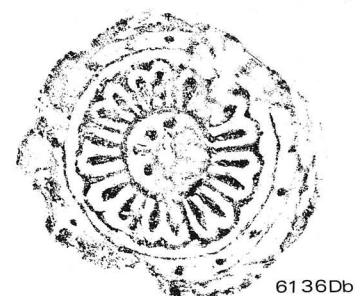
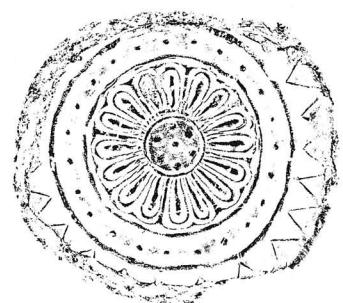
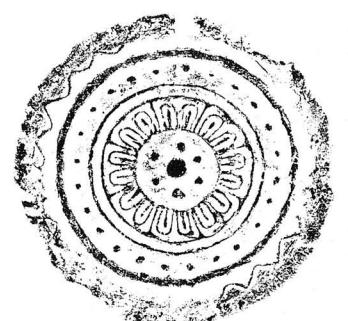
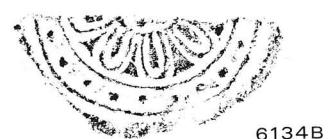
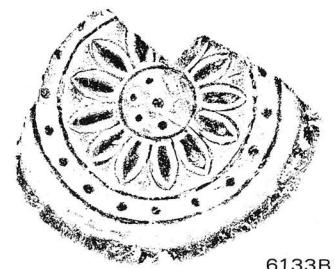


fig 18. 6AFI-PQ 地区出土軒丸瓦

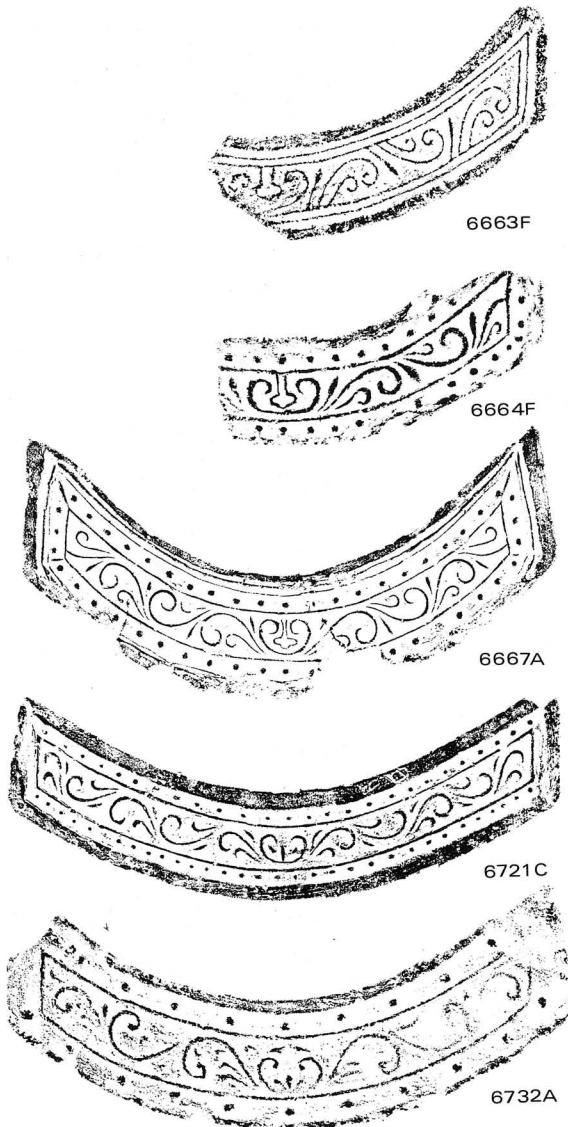


fig 19. 6AFI-PQ 地区出土軒平瓦

紀末の軒瓦は、I期（和銅年間～養老5年）すなわち、平城宮造営当初に再使用される傾向にあり、園池を伴う建物群が京造営とともにつくられた可能性も考えられる。このことは S D1525から出土した和銅五年の紀年木簡からも裏付けられよう。

この地域の瓦の特色は、平城宮内と同范のものが多いこと、平城京内で使用される独自の瓦当文様をもつ軒瓦が認められない点である。こうした特色は、最近の京内調査の実体とは異なる傾向を示している。朱雀大路・羅城門地域の軒丸瓦6316-軒平瓦6710C・軒平瓦6711、左京三条一坊十四坪の軒丸瓦6091-軒平瓦6691B、左京三条二坊十・十五坪の軒丸瓦6316G-軒平瓦6710C・6723、など京内特有の瓦が認められ、京の造営に関しては宮所用瓦とは別個に生産された可能性が示唆されてきたのである。仮に、こうした傾向が京内の普遍的な様相となるならば、今回の発掘区の瓦の存り方は、京内的というより、むしろ平城宮的な様をもっているといえよう。事実、先にも述べたように6285-6667Aの組み合せは、平城宮所用と考えられる歌姫西瓦窯所産の可能性が強い。また、I期から瓦葺きが行なわれたとするなら、邸宅への瓦葺き奨励がなされた神亀元年（724）以前から使用されたことになり、貴族の私邸と考えるよりも、平城宮に関連した公的施設の要素が窺えよう。

註1. 奈良県教育委員会『奈良山』(1973)

註2. 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料II瓦編2解説』(1975)

註3. 奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』(1974)

註4. 大和郡山市教育委員会『平城京羅城門跡発掘調査報告』(1972)

註5. 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報』(1968)

註6. "

『平城京左京三条二坊』(1975)

## 2. 土器

池 S G1504、導水路 S D1525から土師器、須恵器、施釉陶器が出土した。時期的には奈良時代初頭から平安時代前期に属している。

**施釉陶器** 二彩釉・緑釉・灰釉陶器が出土した。二彩釉には鉢・花瓶、緑釉には椀・耳皿、灰釉には壺・薬壺の蓋、甕があるが、いずれも小片である。

土師器、須恵器は遺構にともなったものを図示した(fig 21.)

導水路 S D1525出土の土器 (15~33) 土師器には供膳用の杯、杯蓋、椀、鉢、高杯、煮沸用の甕、長甕があり、須恵器には杯、杯蓋、皿、鉢、四耳壺、甕がある。時期的には26、31のように8世紀初頭のものから、30のように9世紀中頃の土器が含まれている。須恵器18、19の外面は横方向に範磨きされている。

池 S G1504出土の土器 (2~9) 池の排水溝 S D1466出土の土器も含めた。池は常に清掃されたらしく、土器の出土量は少ない。土師器には杯、皿、椀、甕、があり、須恵器には高台をもつ杯、蓋、壺、甕がある。土師器の皿(3)、椀(4)のように奈良時代末のものがほぼ完形に近いかたちで出土する傾向にあり、池の廃絶期をしめすものと思われる。

井戸 S E1547出土の土器 (10~14) 土師器には杯(10・11・14) 皿(12・13)がある。うち11、12は8世紀中頃のもので、13、14は9世紀中頃のものである。

その他の遺構出土の土器 1はS B1510の柱抜取り穴から出土した土師器の杯で、内面には螺旋暗文・放射暗文・連弧暗文が施されており、奈良時代前半に属する。35は土壙 S K1516出土の須恵器の盤で奈良時代後半のものである。

**墨書土器** 墨書土器 (fig 20.) が4点出土した。うち、1点は土師器、3点は須恵器で、いずれも底部外面に墨書がある。2は土師器の椀で「佐」と読める。須恵器3点は高台をもつ杯で、3は「宮」と読める。このほかに、1のように判読不可能なものと僅かに墨痕をとどめるものがある。S D1525出土

**土 製 品** 土器以外の土製品には円面硯、土馬、小型竈がある。

円面硯 (fig 21~34) は下半部を欠くが、陸部と裾ひろがりの圈台を一体に作り、外堤径17.2cmを測る。圈台には範であけた十字形の透孔をめぐらす。陸部の磨滅は著しく、墨痕を残す。なお、須恵器の杯、蓋を硯に転用したもの数点がある。

土馬、小型竈は各々数点あるが、いずれも小片である。

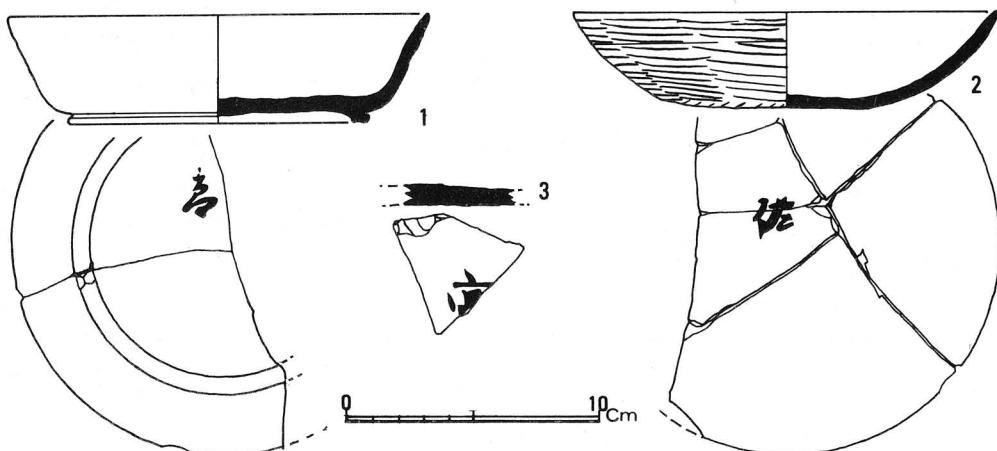


fig 20 6AFI-PQ 地区出土墨書土器

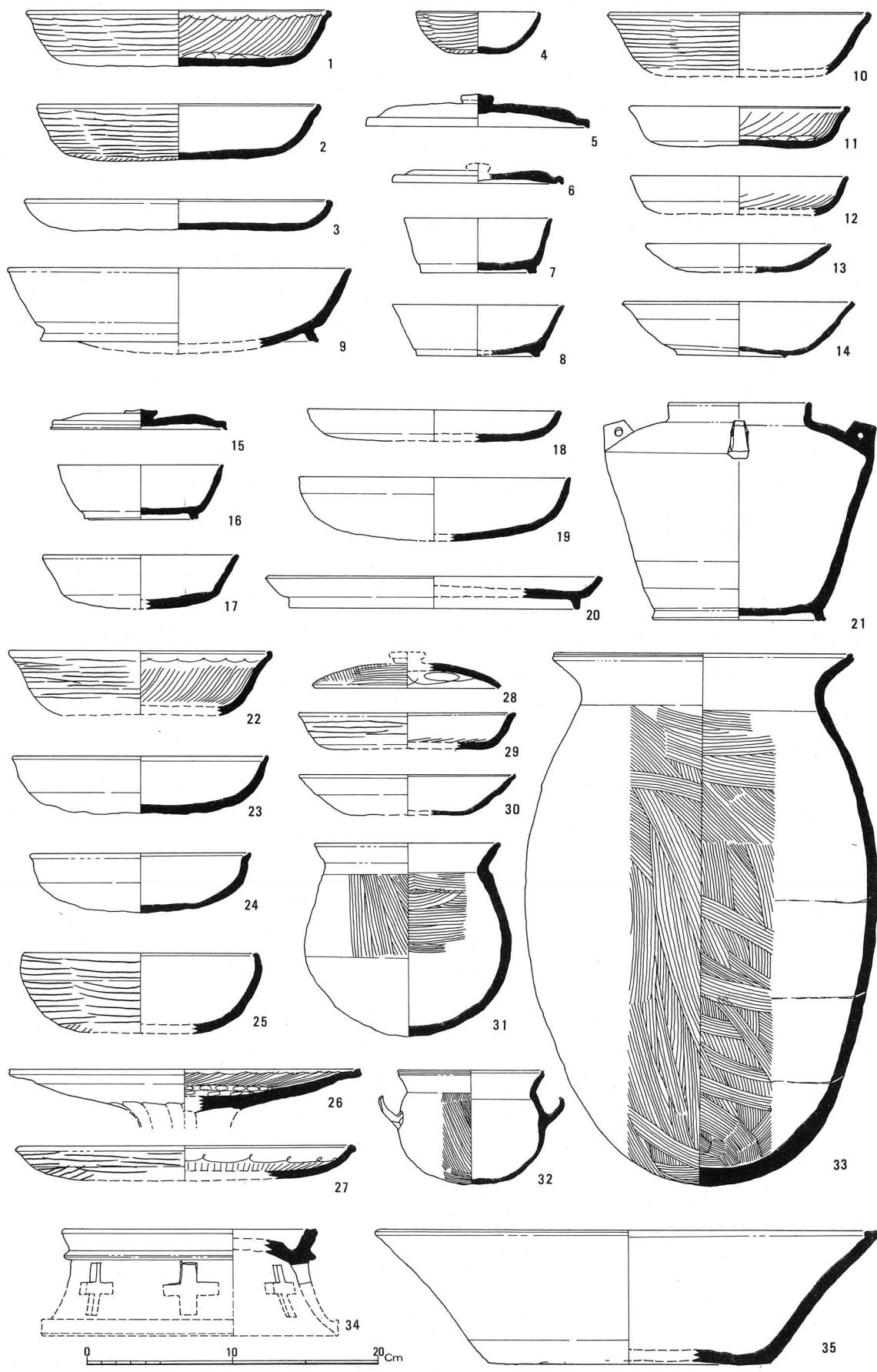


fig 21. 6AFI-PQ区出土土器

### 3. 木製品 (fig 22. P L.15)

今回の調査で出土した木製品は、総数1,000点におよぶ。それらの多くは、S D 1525から和銅年紀の木簡を伴つて出土した。ここでは、S D 1525出土の代表的な木製品約20点を中心として簡単な説明を加えることにする。

**削り掛け** 削り掛け (5・6) 細長い薄板の一端を圭頭状に削り、他端を劍先状に削って両側辺に切込みをいれたもの。切込みは、5では各2ヶ所1回ずつ。6も同様であろう。ともに柾目材。5はS D 1466出土。

**人形** 人形 (7・8・13) 7は割材を加工した木偶で、右肩から左脇腹にかけて平行する2本の刻線と、左肩から左脇腹にかけて5~7本の刻線がある。衣服を表現するようである。顔の表現は腐蝕のため不明。全長15.7cm、胴部幅1.9cm、胴部厚1.4cm。8は薄板の側辺に切込みなどを加えて人形とし、顔を墨で描く。現在両眼と口の墨痕がかすかに残る。板目材。13は人の股から爪先までを現わした組合せ人形の脚部のようだが、組合せのための穿孔はない。板目材。

**横櫛** 横櫛 (14) 端に近い部分の破片。背は中央で稜をなす。歯は両面から交互に鋸でひきだし、歯端を両面から削って尖らす。3cmあたり歯は20本。高さ4.8cm。

糸巻 (1) 糸巻の部材である横木。枠木に差込むために板材の両端を両側から削り細め、中央部に相欠きの仕口をつくって軸棒を通す円孔を穿つ。柾目材。

匙形木製品 (2・3) 板材の一方を両側から削り細めて柄とし、他方を幅広の身とする。両例とも身は中高で匙面をなさない。ともに板目材。

籠状木製品 (4・9) 板材の一端を両面から削り薄めて籠状につくる。他はほとんど加工せず剖面を残す。ともに板目材。9はS X 1466出土。

木針 (11) 板材の一端を圭頭状に削り、それから約3cm以下を断面凸レンズ状に削り細めて端を尖らす。圭頭部近くに円孔を刀子で穿つ。柾目材。

鉤形木製品 (12) 二又になった小枝の一方を短く切斷し、端を尖らせて鉤形につくる。他は樹皮を取り除く程度に削る。鉤部の上面は磨滅。自在鉤かもしれない。

槌の子 (15) 短い棒材を断面多角形に削り、中央に四方から切込みをいれたもの。蓆などを編むときの錘である。

把手 (16) 厚味のある板材の上部中央を半円形に抉り、下部を凸状につくって方孔を鑿で穿つ。孔に栓をして鋤の柄につないだ把手であろう。板目材。

**漆器蓋** 漆器蓋 (17) 木地は朽ちていたが、漆膜の痕跡から板目の板材を用いた挽物であることがしれる。全体に厚手のつくりで、口縁部内面にかえりをつけ、頂部に宝珠形のつまみをつくる。内外とも黒漆塗り。径16.5cm、復原高2.0cm。

その他、細長い板材の一端を凸状につくりだしたもの (10)、復原径8.9cm~19.3cmの曲物容器底板の破片6点、復原径16.8cmの同蓋板の破片1点がある。

なお、S B 1472の北東隅の柱抜取穴から方約35cmの黒漆を塗った平織の麻布 (18) が出土した。糸は1cmあたり7本と9本である。

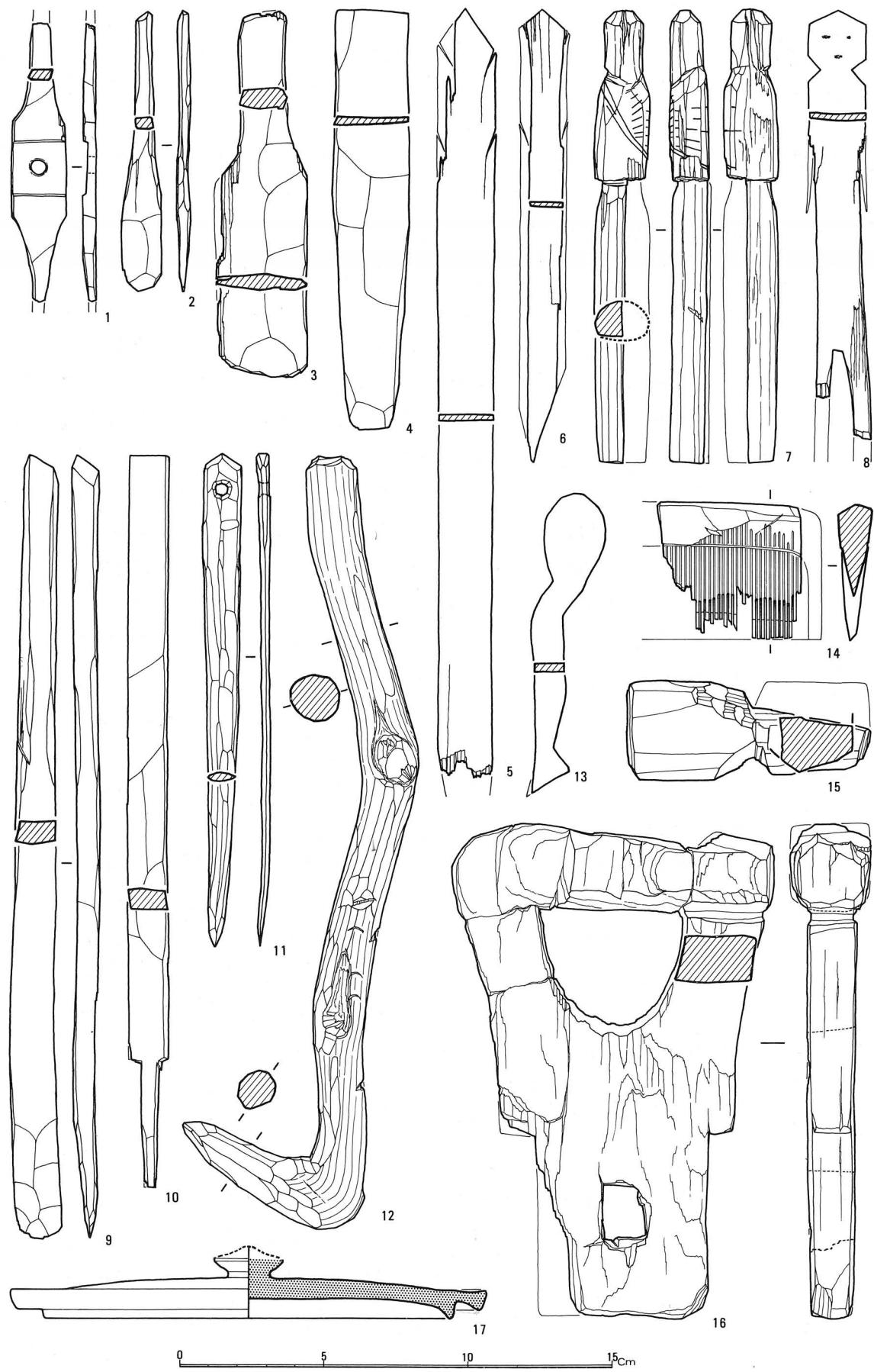
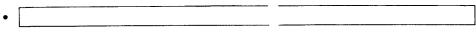


fig 22 6AFI-PQ 区出土木器

#### 4. 木簡 (P L.16)

本遺跡で出土した木簡の総計は64点である（予備調査14点、本調査50点）。出土遺構はいずれも、菰川より池 SG1504への導水路 S D1525で、予備調査ではその中間地点から、本調査では末端の屈曲部から出土した。出土層位は、堆積土の下層に近い暗灰砂混り粘質土に限られ、多量の細長い板状の加工木片が木簡とともに出土した。和銅五年、和銅七年の年紀のあるものがあり（5・13・19）、地名表記等を考えても、木簡はいずれもこの時期のものと判断できる。習書様のものがめだち、削屑が出土していること、記載内容が出土量の割りには多様であること、付札の形態で頭部を圭頭状につくるものがみられることが注意される。以下主なものの釈文を掲げるが、釈文末尾の数字は、木簡の寸法（長さ×幅×厚さ、単位はmm、括弧を付したものは破損により原寸法不明のもの）と形態分類記号（イタリック数字）である。（「平城宮木簡 解説一・二」に拠る）

- 1 • □□□□ 日 せ じ タ せ □□  
     •  (120) × (14) × 2 6081  
     下端に原面をのこすほかは欠損。表には別筆の重複した文字がある。上日数を記したもの。
- 2 大伴牟射二匹 (176) × 18 × 3 6081  
     両側はほぼ原面を保つか、上下は欠損。純（祿物あるいは布施物）の支給に関するもの
- 3 (P L.16) 海上媛□□□ (78) × (18) × 2 6081  
     上端は円弧に削る。左半・下端欠。上総或いは下総の海上郡出身の采女にかかるもの。
- 4 • □里庸□□□手  
     •  143 × (9) × 5 6032  
     右半部欠損。貢進物付札か。里の下の五文字は人名と考えられる。
- 5 (P L.16) • □□□□□□□  
     • <sup>(和カ)</sup> □ 銅七年十月 (120) × 21 × 5 6039  
     上部欠損。貢進物付札
- 6 (P L.16) 阿波国長郡坂野里百濟部伎弥麻呂 (188) × 16 × 4 6039  
     下部欠損。貢進物付札。裏面に文字なし。
- 以上予備調査出土
- 7 • 符□□田□ 片岡部□□□□□□□  
     • 貳斛陸斗五升□□□ <sup>(米カ)</sup> 長江□□□古万呂 (160) × (19) × 3 6011  
     右側のみ欠損。「符」式文書。食料（米カ）支給文書か。
- 8 • 山田□ □□□□□□□  
     • 右件□□□□□□□月十五□使 (236) × 21 × 5 6011  
     下端部折損のほかは原形。ただし表裏とも材の腐蝕甚しい。文書木簡。
- 9 (P L.16) • 御坏物直米二升充奉  
     • 受古女 九月三日 榆垣忌寸 (160) × 20 × 3 6011  
     上方部欠損のほかは原形。下端近く材の中央に小孔がある。「御坏物」は播磨國風土記賀古郡の条に「江の魚を捕りて、御坏物と為しき」とあり、天皇の御坏に盛った食物の意。全体の文意は、同物を米二升で購入したことを示す。本遺跡の性格を考えさせる一つの資料である。
- 10 (P L.16) 中務省少録□□□□ (138) × (10) × 2.5 6081  
     上端部に原面を残すほかは欠損。本遺跡出土の木簡で官職名のある唯一のもの。

## 11 (P L.16) • 鴨郡□

• 北宮俵□

(86)×19×4 6039

下半部欠損。頭部は圭頭状につくる。某国鴨郡より北宮の用物（米か）を貢進した際の付札。北宮は、和銅五年の長屋王頼経（大般若経）跋語の奥の「用紙若干張」の下に見える。同経は長屋王が室の吉備内親王の兄にあたる文武天皇の死を悼み、その追善のために書写させたもの。北宮は文武天皇の旧居といわれ、跋語は同経がそこで書写されたことを示していよう。そうとすれば北宮は藤原京に所在していたことになり、この木簡の北宮も、木簡の年代が和銅年間を下らないことはほぼ確実であるから、必ずしも平城京で考える必要はない。この木簡とは別に、平城京時代に北宮が継続して存在したことは、神亀三年山背国愛宕郡出雲郷雲下里の計帳に北宮の帳内（舎人）として同里から出仕したものいることから知られる。同里にはまた、左大臣すなわち長屋王の資人もいる。これらのことから漠然と考えられることは、文武天皇が崩じた後、北宮は妹の吉備内親王にうけつがれ、平城遷都後も、新京の北宮が造営されたらしいということである。なお長屋王の宅が佐保に所在したことは諸種の資料から知られる（懷風藻、万葉集、神亀経奥書）。本遺跡の所在地が佐保の地とは考え難い。

## 12 (類) 各田部里□古部建

176×18×3 6033

ほぼ原形。裏に文字は無く、里名と人名を表記するのみ。貢進物付札。

## 13 • 若□国小丹生郡野里 中臣部乎万呂御調塙 三斗

• 和銅五年十月

172×21×5 6031

ほぼ原形。墨書はきわめて薄い。「小丹生郡野里」は平城宮木簡347に「遠敷郡野郷野里」とある。

## 14 田寸里日下部否身五斗

164×23×4 6033

ほぼ原形。裏面に文字はなく、里名と人名の表記があるのみ。「五斗」とあるから春米貢進の付札か。

## 15 (P L.16) • 五百冊二

一校授

• 二百七十

(173)×50×15 6081

剥離した部厚い木屑様のものに墨書している。第一面の文字は殊に写経風の整った文字である。「一校」は書写したものの校正を意味し、「五百冊二」「二百七十」等は巻数を示すとみられるから、大般若経の書写にかかわるものか。経巻書写の際に、このような材を手元に置き練習用に墨書したものか。

## 16 • 榛部智麻呂 高椅善麻呂 越越

• 身身身□□ 人人人人人人□

214×25×6 6011

表裏別筆。裏面は習書。

## 17 • 此之 此此此□自□□□白

• □□□

229×18×2 6011

上・下・左は原形、右も上方に一部原面を残す。習書。

## 18 • 職職我我我我

• 也也□□而而

(148)×31×3 6081

## 19 • 和銅七年七□ 和和和銅七年

• 和銅□□四月廿□日□ □

(192)×(7)×4 6019

右側・下端部欠損、上端部と左側は原面をとどめる。

## 結び

左京三条二坊六坪遺跡の発掘範囲は、坪の中心部を占め、坪内の $\frac{1}{3}$ 強の面積を占めるところから、坪内の状況を知る意味で貴重な資料となる。遺構は、坪の中心に大規模な園池が平城京造営前の旧河川を利用して造成された。園池は、導水路出土の木簡、池中の遺物から、奈良時代全般を通じて存続したことが判明した。なおこの園池に併存する建物、塀などは、坪の中心に造成した園池のまわりに計画的に配置され、大きく2時期の改修が認められた。特に、園池西方の建物に、南北棟が多く、近年の京内発掘で東西棟が大多数を占める知見と反し、園池後方の東山を借景にとりこむ構想、すなわち園池と建物が一体の機能をもって造成されている。またA期では、園池の四周に塀を回し他の部分と区画した利用であるのに対し、B期では園池がより広い空間として利用されていること、すなわち、今回検出の建物のうち、最大規模を持つS B1540が、池縁から6～7丈の距離に位置し、註1後世の寝殿造の地割りに類似することなどが注目される。最後に、今回検出の園池の意義および、六坪の性格にふれて結びにかえることにしよう。

日本庭園史研究は、これまで平安時代以降については「作庭記」を含めて文献記録、発掘遺構、遺跡などよりかなり精細に行われてきたが、それ以前については現存する作例がほとんどなく、文献史料、あるいは正倉院御物山水絵図、仮山などから復原する形で行われてきた。そして大方の一一致するところは外来の影響を受けながらも「作庭記」流の原型の萌芽がすでにあり、観賞と同時に行事雅宴に利用できる実用面とがすでに両立していただろうとの推定がなされるのが限界であった。

近年になって、平城宮東院（44次調査）、左京一条三坊の発掘調査により、その一端を註2うかがい得たことは大きな成果であった。しかし前2者が庭の一部を検出したに過ぎなかつたのが、今回の調査では庭の全域が明確になり、地割り、意匠、作庭技法を充分その細部まで示し、上代庭園の再評価を含めて、奈良時代のみならず日本庭園史上画期的なことであり、しかも、その遺存状況の良さからみても今後同程度のものを期待することは困難であり、その資料的価値は測り知れない。

今回検出の庭園と、44次、56次調査検出の庭園遺跡を比較すると、池の水深がいずれも20～30cmと浅く舟遊びなどの宴遊には適さないこと、水際の勾配がゆるい点、汀線が複雑に出入りすること、庭石が奈良盆地東縁部で採取できる褶曲ある石英質片麻岩、花崗岩を用いているなどの共通点を持ち、奈良時代作庭技法の一端を知り得た。なお、今回の園池では、池底にも玉石を敷き、池縁に石を立てるなどの特殊性もみられ、池中からの植物遺体、花粉分析資料より、当時の庭園植生をもうかがい得た。

また、当時の日本文化に密接な関係のあった慶州に遺存する臨海殿庭園（雁鴨池）が、註4その庭園意匠について、すなわち、①旧時の水路を利用して池水を補給する ②池を近景に東山（金剛の連嶺）を遠景とした借景園である ③庭石で水蝕ある半花崗岩質のものは池畔、水辺に、砂岩質のものは仮山などの頂に使用するなど、庭石の石質に応じて使用場所をかえる ④庭石の使用が、池汀の変化する所、例えば突き出せる先端とか湾曲の開始点に集中する ⑤東側中央部、池の方向に向って磚を敷き並べているなど、規模こそ違え、今回検出の庭園と多くの類似性が見られたことは興味ある点である。

次に、左京三条二坊六坪の遺跡の性格をみてみると、

①出土遺物のうち、日常生活で使われたと考えられる土器や木製品などの遺物が少い。②50点の軒瓦が他の京内遺跡と異なり、いずれも平城宮使用のものと同型式に属する。また平城宮瓦編年Ⅰ期の軒瓦も見られ、京内の住宅に瓦葺きを奨励した神亀元年以前からすでに瓦を葺いた建物が存在した。③木簡ではまず(1)の北宮が注目される。この木簡が某国鴨郡から北宮の用米を送進した時の付札とすれば、この遺跡は北宮そのものであることになるが、用米は京進されたのちにこの地に移動したとも考えられるから、これだけではなおそのような断定ははばかられる。さきに述べたように、和銅五年の長屋王願経の跋語にみえる北宮は、藤原京の宮である可能性もあり、この木簡が同経とほぼ同時期のものであるだけに、木簡にみえる北宮も必ずしも平城京のものとは考えられない。北宮がその後平城京時代にどのような形でだれに伝領されたが不明であるが、天皇とその一族にかかわる宮であることはまちがいなく、そのような北宮とこの遺跡が深い関係にあったことは確実とみてよからう。これとの関連で、(9)の御坏物云々の木簡が注意される。御坏物という表現は、天皇および一族の食膳に関するものであるから、これもまた、この地の利用者に天皇一族が含まれていることを示している。また(10)の官職名を記すものも、木簡の用途はいっさい不明であるが、これがほかならぬ中務省の官人であることは注意される。これを要するに、木簡から知られることは、この遺跡が天皇家と密接な関係をもつものであるということである。④園池の形状、水勾配から考えて、これは曲水宴に使用されたものと考えられる。

註5 曲水宴は毎年三月三日に行われる禊の儀式で、正史には天皇が臨御して行なう公的行事の記事がみえる。このほか懐風藻には公卿の私宅の曲水宴でつくられた詩が載っている。禊をやるために清浄の水を流す必要があり、清水を流すために、導水施設 S X1523や、園池北部の上水を取る淨水施設 S X1524があり、池底に玉石を敷くなどの庭園意匠がみられる。⑤平安京の都市計画にあたって内裏の御苑として作庭された神泉苑と類似した占地である。⑥A期において、園池四周に堀をまわし、他の空間と園池を区画して利用している。

以上のことから判断して、この遺跡は特別な用途をもつ園池中心の公的な宴遊の施設である可能性が高い。また天皇とその一族に深い関係のある点からすれば、離宮ないし親王宮との関連も考えられ、この遺跡をふくむ全体の敷地は、2町ないし4町の規模を持つものであろう。なお隣接する左京四条二坊には藤原仲麻呂の田村第、市原王の邸宅が存在したことが文献から推定されている。また邸宅の園池を詠んだ万葉集、懐風藻などにも今回検出遺構と同様な庭園意匠がみられることも注目される。

註-1) “南庭を置くことは、階隠の外の柱より、池の汀に至るまで6・7丈、若内裏儀式ならば8・9丈にも及ぶべし” 「作庭記」

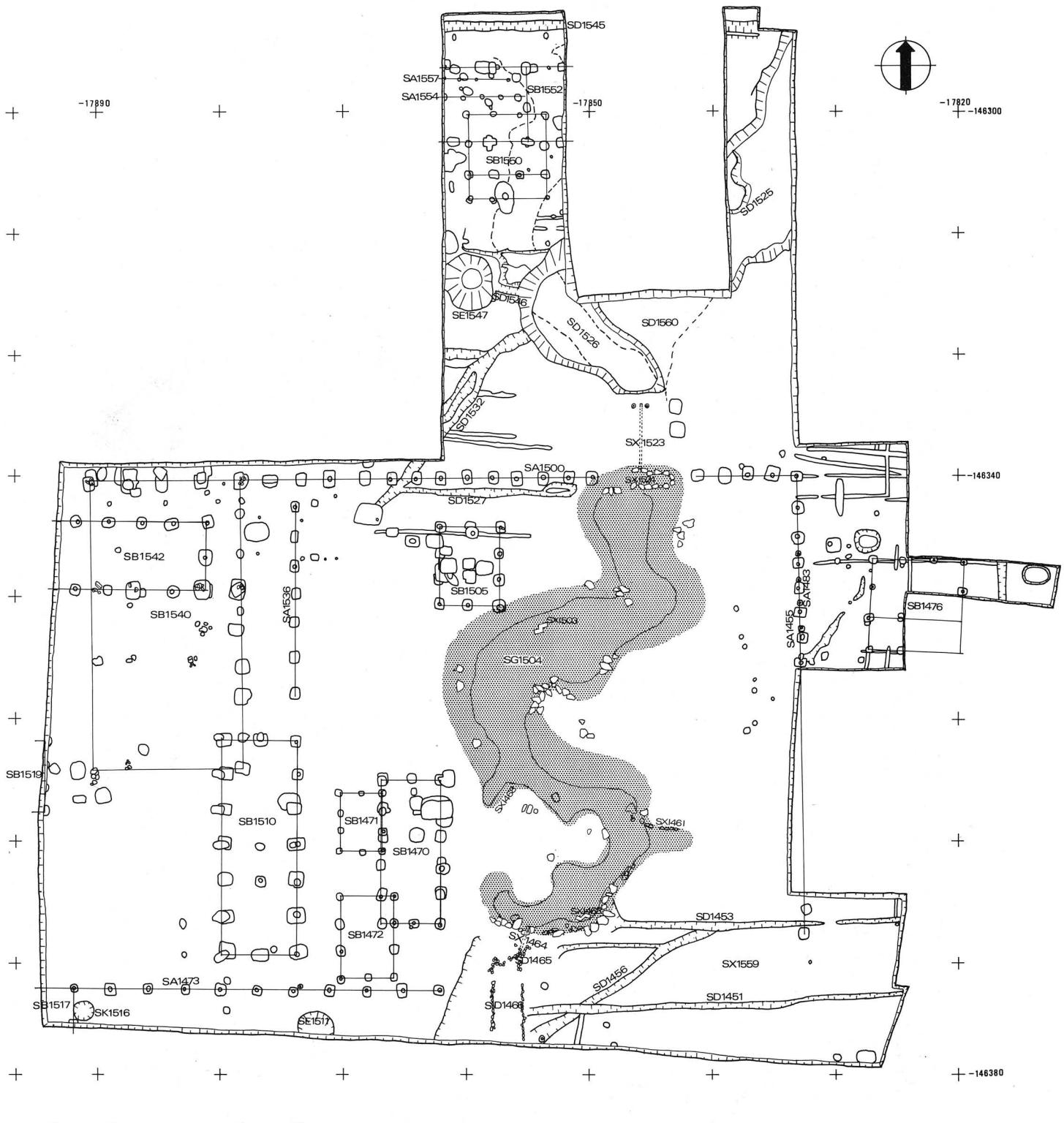
註-2) 「奈良国立文化財研究所年報」 1968

註-3) 「平城宮発掘調査報告VI」 奈良国立文化財研究所学報二十三冊 1974

註-4) 「平安時代庭園の研究」 森 蘿

註-5) 7頁参照、他続日本紀で、鳥池塘（神亀五年）、宮西南池（天平宝字六年）島の院（延暦四年）などにおいてそれぞれ曲水宴の記事が見える。

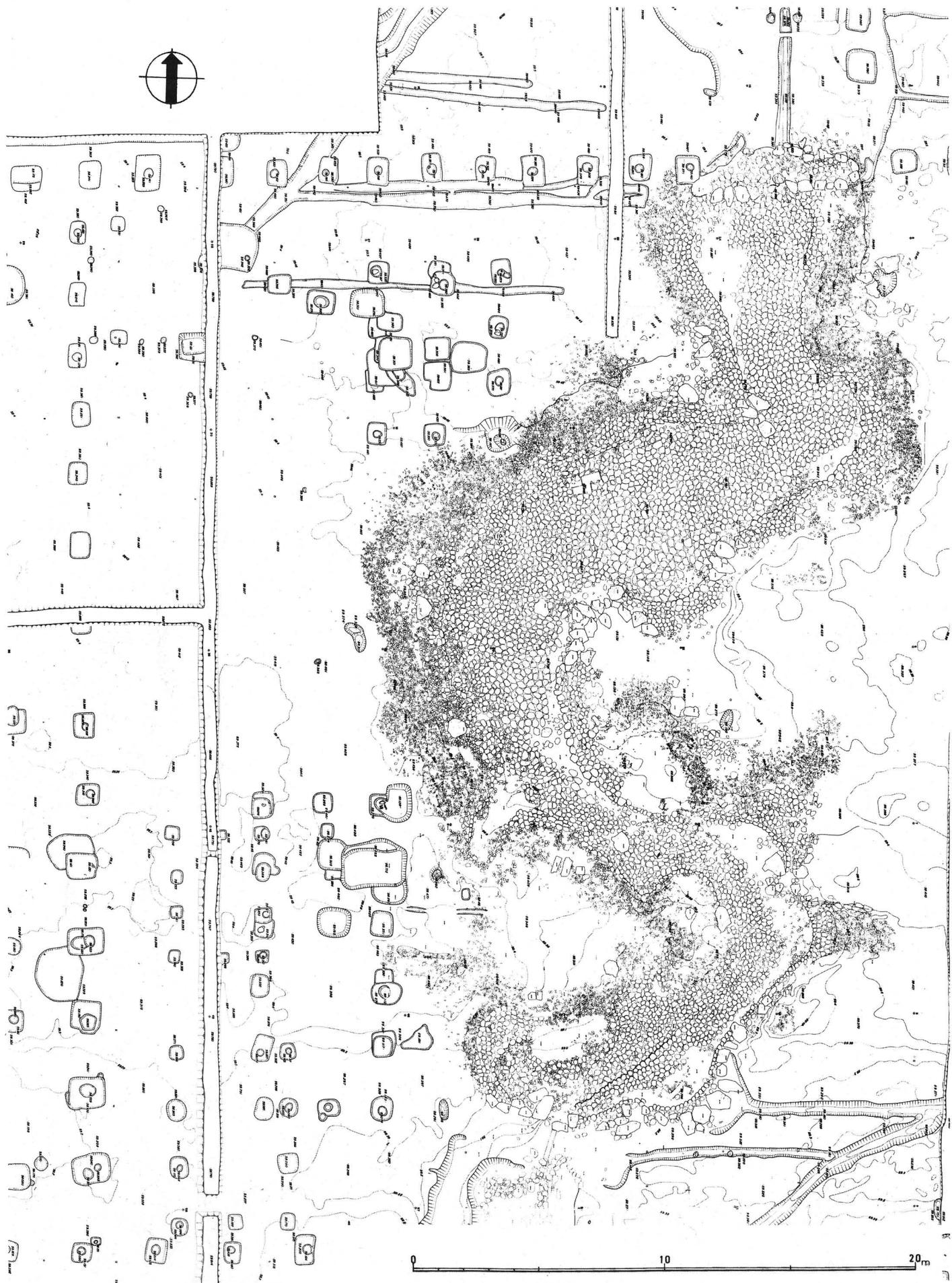
註-6) 7頁参照、他長屋王佐保の宅（懐風藻）、藤原不比等、葛井連広成、石川朝臣（万葉集）など各邸宅の庭の記事がある。



### P L. 1 6AFI-PQ区遺構実測図



P L. 2 6AFI-PQ区本調査全景写真



P L. 3 園池全景実測図



P L. 4 園池全景写真



SB1540 (南より)



SB1505 (西より)



SA1473 (東より) SA1500 (東より)

P L. 6 導水路・井戸

S D 1525 (東より)



S E 1511 (南より)



S E 1547 (南より)



P L. 7 柱 穴



S B1540, S A1538 柱穴（南より）

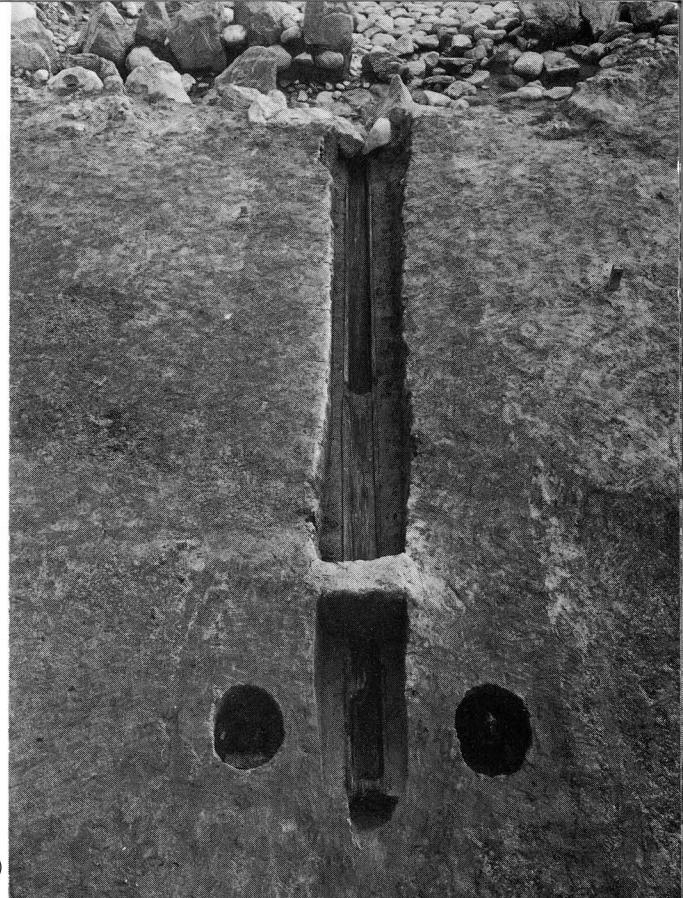


S B1540、1542柱穴（南より）



S B1540 柱穴（南より）

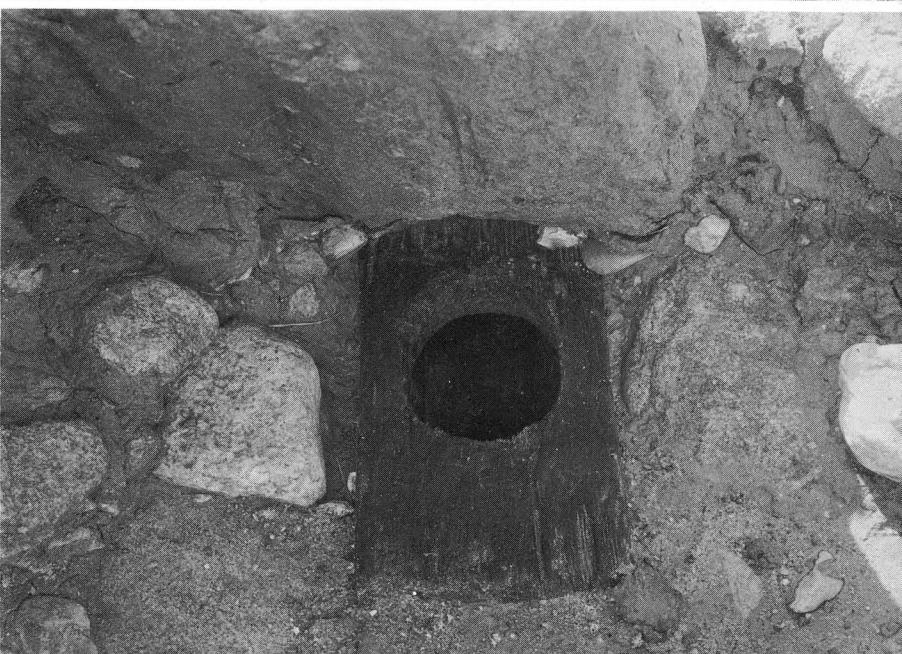
P L. 8 木 桶



S X1523 (北より)



S X1464 (西より)



S X1464 (北より)



S X1463 (東より)



S X1503 (南より)

P L.10 池 細 部



岩島（西北より）

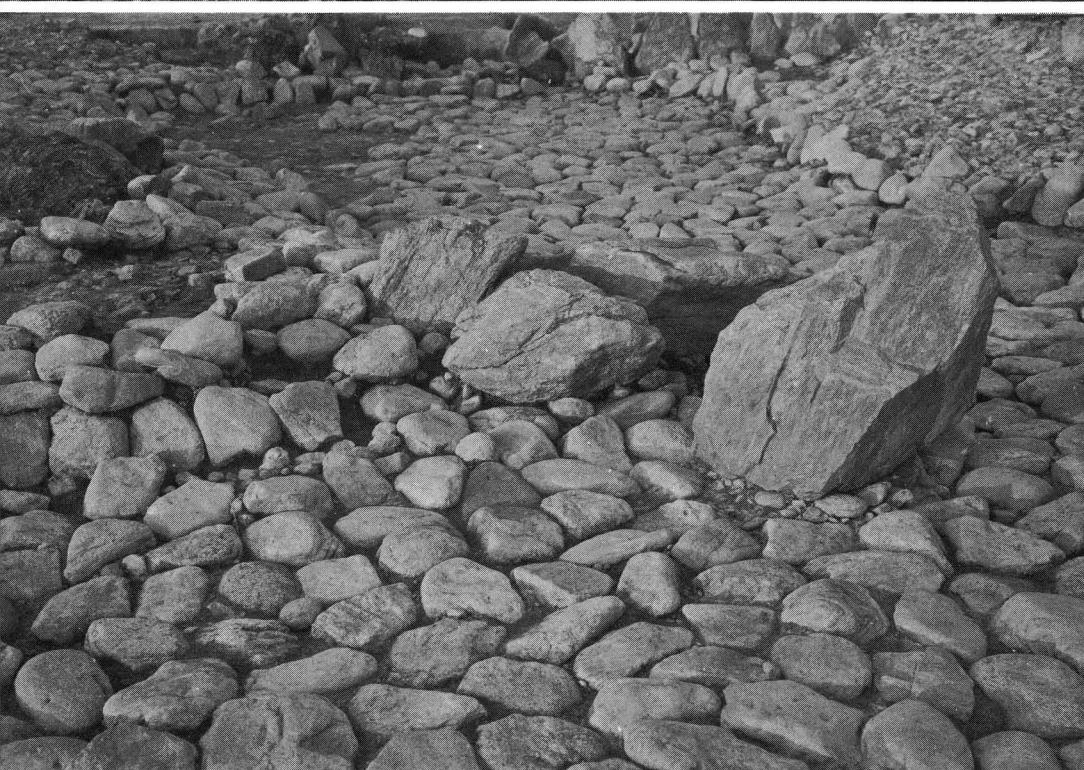


東岸州浜（南より）



東岸石組（東より）

P L.11 池 細 部



P L.12 池 細 部

S X1461 (西より)



池尻西岸 (西より)



池尻南岸 (東より)





池全景（南西より）



池南辺西岸（南西より）



池中央西岸（南西より）

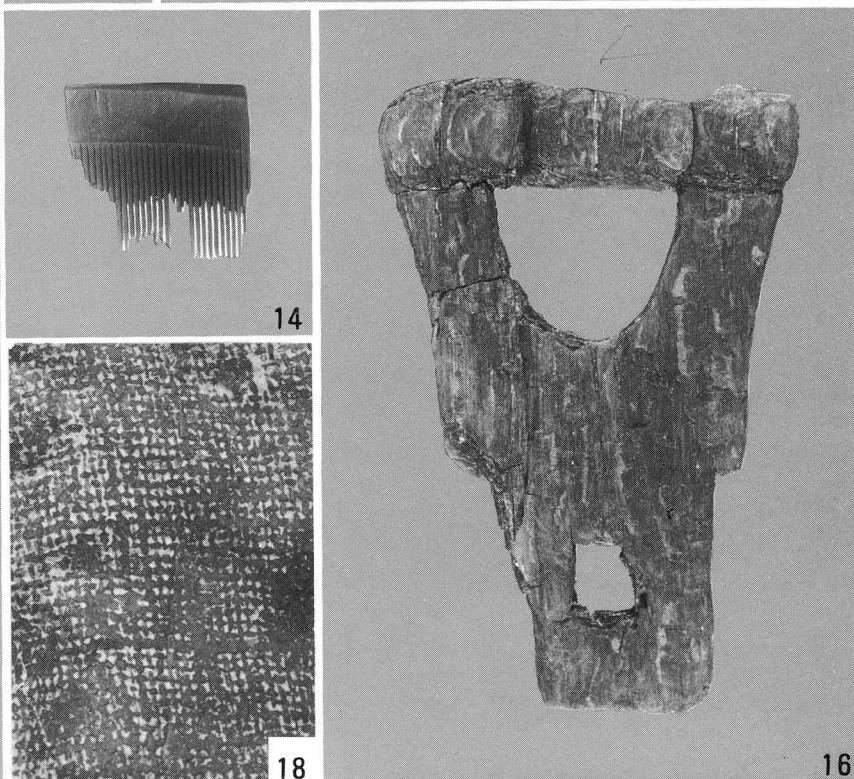
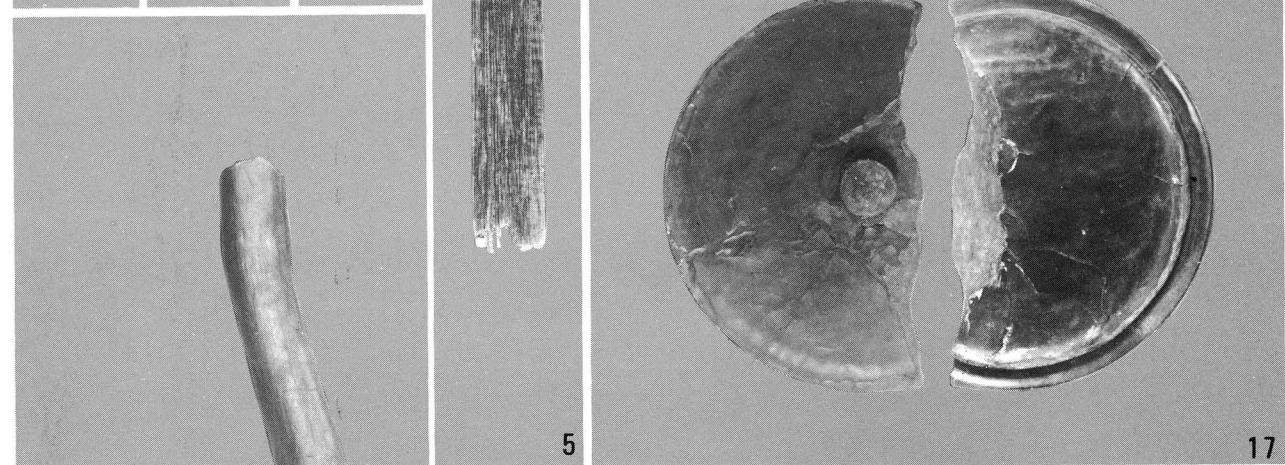
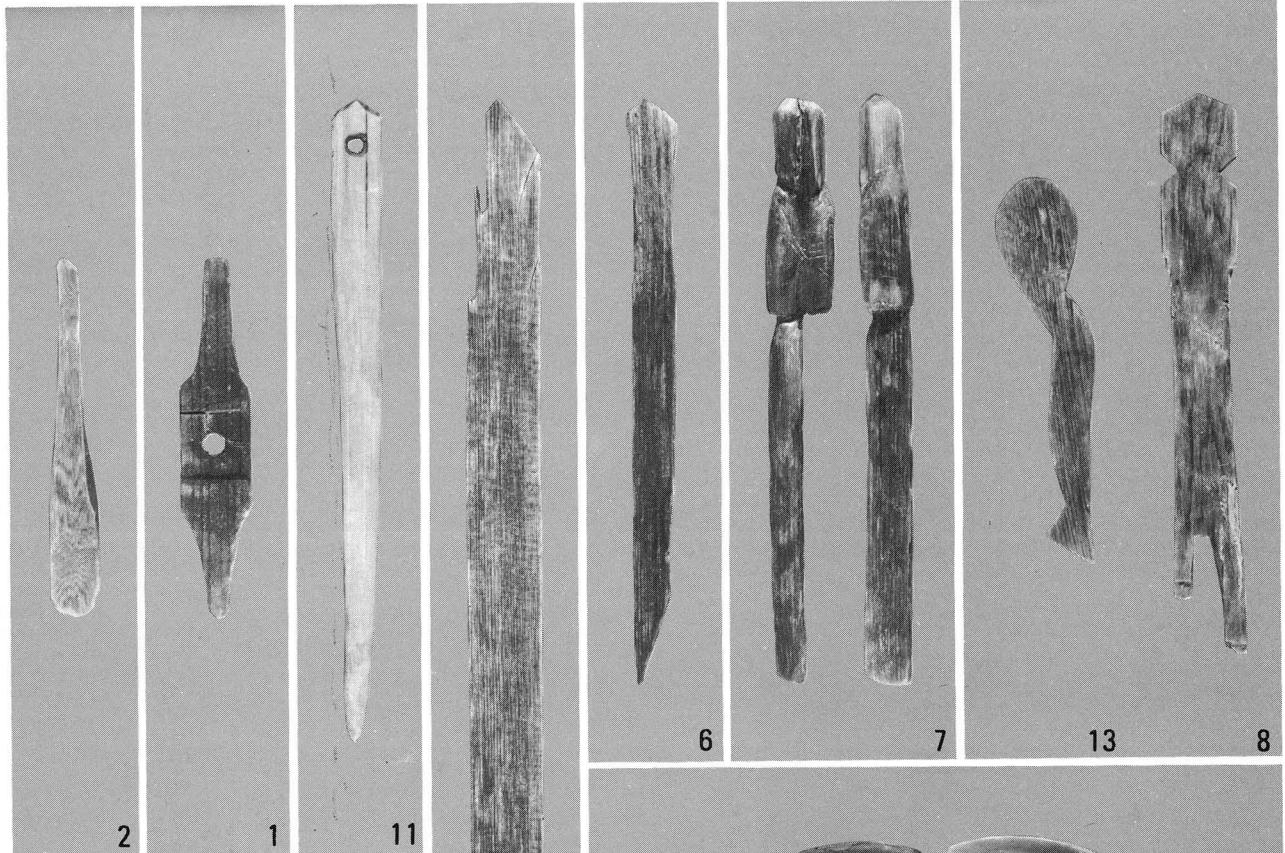


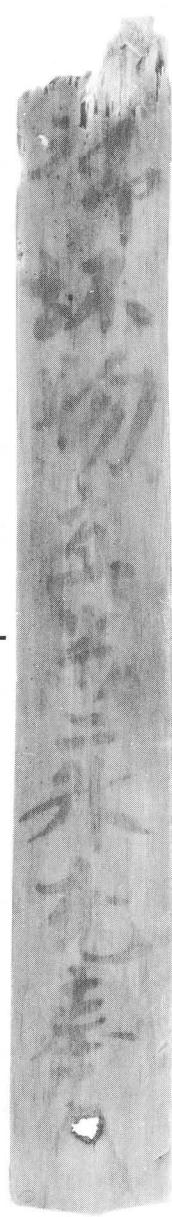
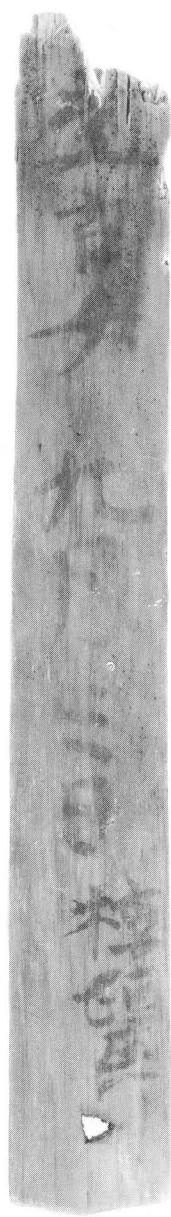
6282 B - 6721 C



6285 - 6667

P L.15 木 製 品





6



15



10



11

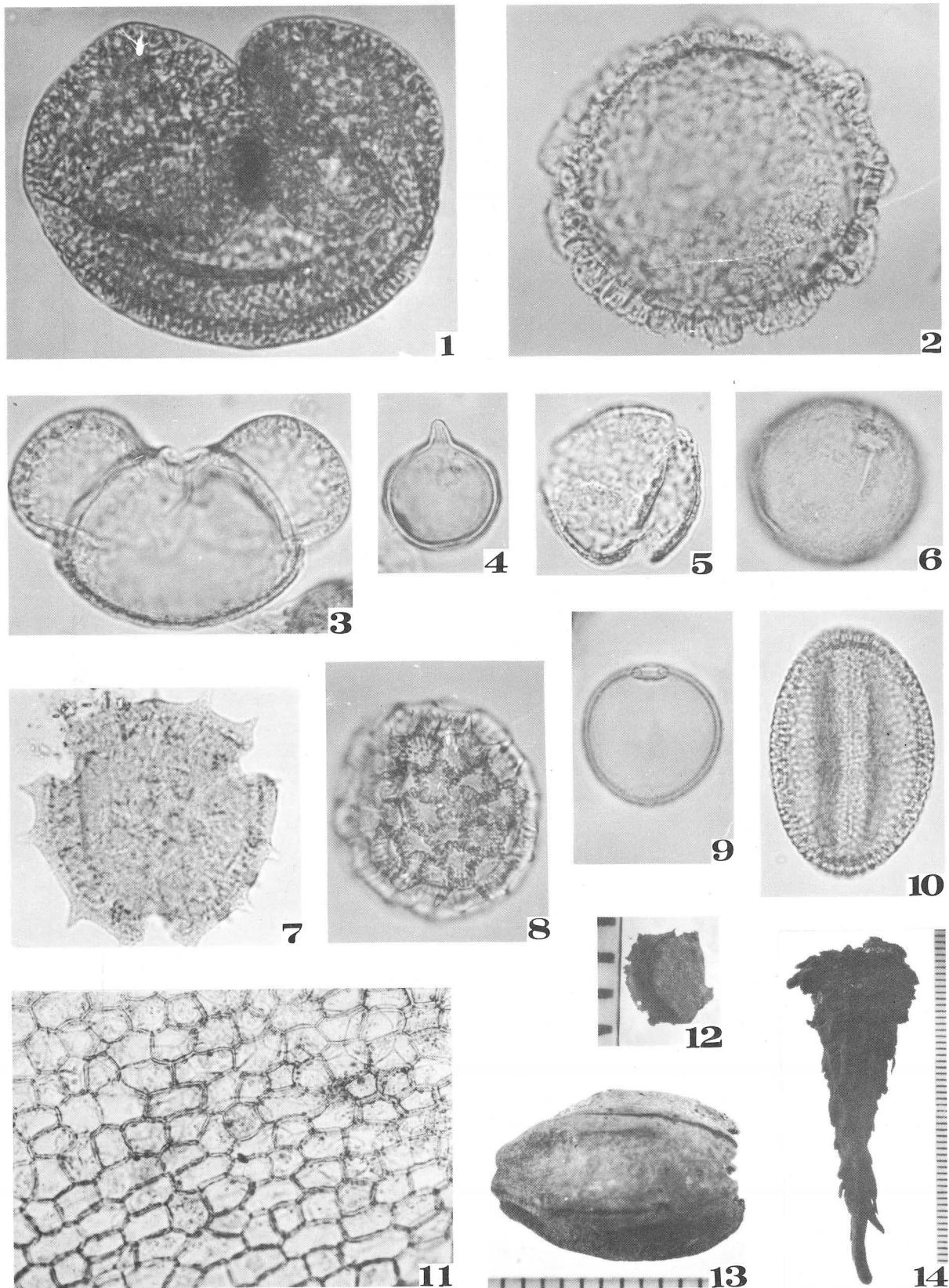


3



5

P L.17 植物遺体



1. *Picea* (トウヒ属) 2. *Tsuga* (ツガ属) 3. *Pinus* (マツ属) 4. *Cryptomeria* (スギ属) 5. *Queruus* (コナラ亜属)  
 6. *Fagus* (ブナ属) 7. *Patrinia* (オミナエシ属) 8. *Persicaria* (タデ属) 9. *Gramineae* (イネ科) 10. *Fagopyrum* (ソバ科)  
 11. *Potamogeton distinctus*の果皮 (ヒルムシロ) ×100 12. ibidの内果皮 13. *Melia azedanach* (センダン) の内果皮  
 14. *Pinus thunbergii* (クロマツ) の球果 1 – 10 pollen, magnitude ×900

昭和 51 年 2 月 10 日 印刷  
昭和 51 年 3 月 31 日 発行  
平城京左京三条二坊六坪  
発掘調査概報  
編集発行 奈良国立文化財研究所  
印刷 共同精版印刷株式会社

